

井川春良『兼山詩文』

―西尾藩儒臣の詩文集―

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】

漢文学 近世前期 井川春良 土井利勝 西尾藩

はじめに

本稿では、西尾藩に仕えた近世前期の儒者、井川春良^{いかわはるらう}（元和三年（一六一七）〜貞享三年（一六八六）、七十歳）の詩文集『兼山詩文』を翻刻する。

春良は、従来、儒者としてはあまり注目されることがなかった。しかし、「利勝公遺事」（幕初に老中・大老を歴任した土井大炊頭利勝の伝記資料）を著したことが知られており、愛知県西尾市大給町の妙満寺には墓石が残されている。その他、「信竜寺の梵鐘」（市指定文化財・工芸）などの関連資料も知られており、『西尾町史』（西尾町役場 昭和九年四月）、『西尾市史近世 下 三』（西尾市史編纂委員会 昭和五十一年三月）他には関連の記述も備わる。従来、注目されることがなかったのは、その詩文集が伝わらず、その人の活動や思想を具体的に伝えるものがなかったからであろう。

春良が活動した時期は、元和偃武以後、文運が隆盛に向かったと

される時期である。しかし、この時期には、邦人詩文集の刊行されたものは未だ少なく、写本で伝存するものも極めて稀である。『兼山詩文』は、近世前期の儒臣の生活や信条をうかがい知ることのできる資料として、伝存する類例の乏しい貴重なものである。

さて、本書は、延宝四年（一六七六）の「冬至前一日雪」から天和三年（一六八三）冬の「賀畏友多米時富丈夫生三郎詩一首」まで、約七分の詩文を収録している（本文中の丁巳が延宝五年である）。春良の六十歳から六十七歳にかけての作品である。ただし、これは本来残されていた全体の一部である可能性が高い。すなわち、本書の題籤には「兼山詩文」と墨書するが、その下方に丸く、水で濡らして表面を擦ったような痕跡がある。おそらく、本来はそこに巻数を示す数字や文字が入っていたと考えられる。すなわち、もともとは五、六冊程度にまとめられていたものが、伝存の過程で分散してしまい、それを隠蔽するために題籤に手が加えられたのであろう。

作品の配列は、時系列に沿っており、数名の手で書かれたものではなく、一筆で書かれたものと思しい。春良の自筆であるか否かは不明であるが、紙質はそう新しいものではなく、近世中期を下らないものと思われる。

本文中には、主君である土井兵庫頭利長に代わって制作した「西尾八幡神宮再建頌」他の作品も収められており、「御劔八幡宮神鏡」の銘文（『西尾市史 古代中世近世 上 二』（昭和四十九年十二月）に拓本の図版を載せる）も、春良の代作であったことがわかる。また、本文中に見える、信龍寺、実相寺（瑞境山）、妙満寺、唯法寺などは、いずれも西尾市内の寺々であり、家中の人々との遣り取りが盛んであったことを見ても、当時春良が西尾に在住して、儒臣としての役目を果たしていたことがうかがえる。

なお、収録された作品の分析と考察は別稿を期すこととするが、

収録された詩文には、理想と現実の間で懊悩する老儒臣の心情がよく表現されている。とくに、不幸にして愛孫を喪った悲痛は、時代を超えて私たちの心に強く響いてくる。

(1)

鷹見安二郎『土井利勝』(古河市・古河市史編さん委員会昭和五十年)には、つぎのようにある。

「著者の井川春良は林道春について学び、学問を以て七、八歳のころから利勝に仕え、寛永の諸家系図編さん時も参画しており、重修譜の利勝の条にも「正保元年正月十日さきに諸家系図編集の時、家臣春良もそのことにあずかりしにより、時服二領白銀三十枚をたまふ」とある。利勝の死後分知した時、利長に従って仕えていたのである。(中略) この「利勝公遺事」は「事実文編」にも収められて刊行されているが、それには前書がはぶかれていて、書いた由来がわからないのと、著者の井川春良が何者かわからなかったためであらう、あまり注意されなかったが、右のように著者の経歴がわかり、書いた由来がわかってみると、利勝に関する史料として価値が極めて高いものであることがわかる。内容を見ても、春良自身が「聞いて知り見て知る事実」を記して、虚飾がなく真実味にあふれている。」

(2)

『西尾市史 近世 下 三』「七 西尾藩の教育」には以下のようにある。

「西尾藩に藩校が創設せられたと思われるのは西尾藩主としての土井氏第一代利長の治世の時期である。土井氏と特に深い関係があり、土井氏関係者の寄進の書画を蔵し、土井氏の重臣の墓が並ぶ下矢田町の養寿寺に「吉良莊養

寿寺二尊堂銘并序」と題した、養寿寺境内の西北隅にあった古堂内の二体の尊像の銘二〇句を記した木製扁額(縦二九センチメートル 横 一三九センチメートル)がある。その終りに、「貞享二(一六八五) 季乙丑兼山井川春良愚老六十九歳拭眇眼強姜手涉管于西尾城隅学舍独善牕中」と筆者が井川春良であることを記してある。このなかの西尾城の隅にある学舍独善牕(窓)というのがおそらく土井氏の藩校であったと推定される。その教授と思われる井川春良については、西尾城の護城祈願寺として徳次町信竜寺に藩主土井利長が寛文十一(一六七二)年に寄進した梵鐘の銘に「土井微臣井川兼山春良欽誌」とあって、井川春良が当時世に認められた学者であったことを示している。寛文十一年に春良が学舍独善牕の教授であったとすれば、さきに述べたように、土井氏の藩校は利長時代に創建されたのである。井川春良は、その墓(大給町妙満寺)に「貞享三丙寅曆六月廿五日」に没したと刻まれているから、養寿寺の「二尊堂銘」を書いた翌年七〇歳で没したのである。眇の出した眼を拭い、姜の手を強いて、管を涉つたと老いを嘆くことばも実感であったと思われるが、「二尊堂銘」の文字はりっぱなものである。かれはまた、延宝二(一六七四)年には養寿寺の縁起を書いている(同寺蔵拓本)。

なお偏照院春良嬪人墓(大給町妙満寺)の墓銘によれば春良は林羅山(一五八三—一六五七)を師としたとあるから、朱子学者であっただろう。嬪人は妻である。

また、『西尾の人物誌』(西尾市教育委員会 平成七年三月)には以下のようにある。

「井川 春良　いかわ　しゅんりょう

元和3（1617）年～貞享3（1686）年

独善窓学舎の教授

西尾藩土井氏の儒臣であり、林羅山を師とする朱子学者であった。藩校の前身である学舎独善窓の教授をつとめ、当時世に認められた学者であった。

春良は寛文5（1665）年に八ツ面町久麻久神社の由緒記、寛文11年に西尾藩主土井利長が護城祈願のため徳次町信龍寺に寄進した梵鐘の銘文を書いている。

また、延宝2（1674）年下矢田町養寿寺の縁起を書いている。これは貞享2（1685）年の書で、「養寿寺二尊堂銘」とあり、立派なもので、春良が69歳の時、目やにの出た眼を拭い、萎える手を強いて筆を取ったと記している。

（3）
春良は貞享3年に死去した。墓は大給町妙満寺にある。利勝の三男。万治三年に奏者番、寛文三年に三河西尾へ移封、天和元年に隠居、元禄九年に六十六歳で死去。

書誌

原装。大本一冊。濃縹色表紙（二七、二糎×一九、三糎）。題簽は左肩無辺、「兼山詩文」と墨書。本文は無辺無界、每半葉十行十六字、字高二〇、四糎（本文第一丁オモテ「近日く静観」を計測）。個人蔵。

凡例

翻刻にあたり、原則として原本の表記を尊重した。しかし、印刷の都合上、一部の異体字を通行の字体に改めた。

読みやすさを考え、適宜改行を変更し、空角を追加した。

原本の一部には、句読を切ったり、固有名詞に付したりした朱点や朱線があるが、翻刻ではこれを省略した。

翻刻

冬至前一日雪

近日一陽欲復辰　紛々白雪勢如曠　静観上六至陰象　戰兢自持君子人

雪

地面皚々敷白沙　栖鴉飛鳥噪諠譁　獨憐幽竹寒松色　共著繽紛玉屑花

寒松

天地嚴凝千樹凋　彰寒貞操獨翹々　可憐世上繁華節　空有德音却寂寥

嘆老

千竿竹裏蛩居身　嘆息世間多少人　残喘自今成底事　只依典籍養精神

述懷

顔子一瓢誰得企　展禽三黜不為卑　自憂狂狷亦難學　吟了樂天中隱詩

又

君恩使我免飢寒　此外無求身自安　重耳不聞輕薄語　老顏只耻少年

看

又

青松綠竹共相宜 愛著剛強正直姿 草木」(ウ) 却成君子象 以人不若此生資

又

可憐世上俗豎徒 似喜人憂為我娛 本是農家者流事 看來汲々戚田

夫

又

今日諸人無意民 謾甘肉食賞奇珍 疲癯惇獨嗟誰告 衆士已窮君亦

貧

又

民耕麥畝冀其根 勞苦飢寒朝及昏 九十春光保生否 幸期夏日得饗

殮

又

強顏貪利面諛頻 徒費俸錢獨奉身 有問蒼生今日樣 堯時禹稷以前

民

又

曾上城東山頂遊 吉良庄内似林丘 料知富士峯頭見 六十餘州如小

洲

又

優游勤學惜三餘 寒夜燈前世慮疎 西尾邑中多少火 何家一盞照經

書

又

士耽歡娛苦面從 民哀培克恨年凶 病翁六十獨安樂 馮案儼然獨學

庸

遣興

寂寞讀書窗 燈前影共雙 老衰容色悴 病廢壯心降 思似放流屈

形如居士龐 阨窮而不憫 早晚患吾邦

見硯氷

志如肅々架頭應 身似寥々粥飯僧 欲握筆聊写心緒 硯池無水有堅氷

奉謝恩賜外國奇珍之茶碗酒盞于」(オ) 愚臣之嬰兒 嬰兒吮乳

耳 謂何乎 代多米時富

茶盞酒盃盡美功 謹因器物說丹衷 不為酒困孔夫子 無好茶遊正叔

翁 太保作文箴喪志 周公制禮惡奇工 今君忍愛賜臣愚 仰望此心

益擴充

十二月十日詣 先君原廟利勝寺有感

富貴在天又在人 治平依主最依臣 先君五十萬金積 何事子孫難奉

身

閑眠

世態俗情實可憐 徒貪酒食羨金錢 出門枉接利功客 不似書窓一睡

眠

古詩一首十韻上多自反軒

寒氣推不去春風挽不來 倚爐求活火勞箸搜冷灰 几案繁蛛網書編沒

竈煤 塾居安小德默坐病多才 老耳雖無聞感時自覺衰 殘喘雖可斃

憐世願生財 君哲知仁政臣明說棟材 民當喜恩澤士應獻壽杯 何故

天人別年々作穀災 思今又思昔嘆」(カ) 白日西頽

歎俗學

舜倫本雖具性 心法則在經書 我國今貴文學 看來皆似蠹魚

堂前松梅

梅花松葉秀窮陰 不屈嚴凝霜雪侵 並觀先魁後凋操 點頭動靜共存

心

俳諧

儉約法嚴質勝文 士民無奢自辛勤 貨財誇禮市閔白 驕泰飾威竈將

軍 君子固（ウ四）窮此吾事 依仁遊藝獨欣々

丁巳試筆

嚴冬已盡自溫然 筭老再逢丁巳年 今日人心春到否 陽和只是在詩篇

又戲作

新年世樣似無聊 民困士窮春色招 動植慣人同儉約 白梅黃色鳥共寥々

戲為

貧乏自然儉約 飢餓何以驕奢 庶民似步濱蟹 仕宦如驚物蝦庶民本作政刑

—（オ五）

嗚呼 山崎九左衛門久重妻諱象和調幾佐戒名妙蓮者予舍弟顯尹之女也

不幸早為孤 而被鞠育於顯尹之乳母 在洛之邊鄙 而經年

之後乳母亦沒焉 乙卯之夏 來西尾依予也 經曰兄弟之子猶子也

況外無所親 予愛之實如予子矣 聊成裝具以嫁久重 而不

幾嬰病 丙辰九月二十四日 掩粧矣 久重哀之 春良痛之

不幸之又不幸 吁嗟 謂何乎 延寶五年丁巳正（ウ五）月六日

亡後百日也 詣葬埋之地願正寺 向墳墓抒哀情以為詩一章 幽

神尚享之

年 月如流恨殺人 生涯雖苦又逢春 春光不及土中質 向墓悽然哀淚

新

過審隆寺

朝陽遍照正東山 寂寞無塵境自閑 雖不逢僧聞觀念 先知透得利名

関

過實相禪寺賀精舍經營

氣轉禪関瑞境新 法堂書院勢盤圀 惟非來客遊人樂 雀賀落成爲賀

春

—（オ六）

唐丹山禪師修復寺院之荒廢 写喜氣於新年試毫之芸韻

蘭若玉成功德臻 天時僧意共和辰 彩霞掩映棟雲美 想像吉良上世春

前日裁一絕賀精舍經營 備住持禪師之乙覽 竊恐有又浮井水為

春良洗惡詩之笑也 不然却得霞句雲章之報矣 幸哉 且雉賢祖

祐兩英傑同賜酬和 幸之又幸也 卷而又舒了而又讀 感賞歛欣

不得緘默 又以前韻（ウ六）成一章 上丹山禪師案下 兼呈雉

賢祖祐兩英傑 章句不法音響不節 以志之所發強為詩而已

新詩新殿与年新 縣密工夫可筭困 次第番風梅蕊外 禪林更有筆花春

丹山老師被和不佞試毫之臭韻 再以前韻達微志 恐老師却有六

虫篇

春入吾廬猶寂然 因逢僧語實知年 欲和一曲無新意 又慣蠹魚尋簡

篇

萬邦春色一聊々 氣習自偏吾獨侶 猶嫌（ウ七）世路風波事 暫遊

禪室喜清寥

謝秀才賢首座賜愚夫試翰之和章

人祝新春思適然 吾歎衰老羨盛年 書牕自乏風流興 只有英雄錦繡

篇

由來病廢耳聊々 未聞新吟心自侶 劣材耻身無外慮 靜感敲推樂

寥々

禪侶祖祐英傑暫掛錫於瑞境山之日 適見予試翰賜唱和 雖未接

顏似有舊情 謾以前韻述鄙情

世間春事悉忙然 吾自閑如不記年 適（ウ七）以惡詩談俗事 欣悅

換得悟真篇

憂已感時不自聊 獨非商賈士民侶 木桃雖喜瓊瑤報 春色於予似沈

寥

答賢首座

讀改削一章謙退一章 喜禪侶有辭讓之意 耻腐儒無羞惡之情
汚芳押賦一絶 述微志聊發知之端云尔

謙遜恭己學詩篇 禪客何尊章句連 大道本來無字畫 巧言遂不得天
全

和妙滿寺住持沙門試毫之韻

「(ハ)

三陽時節世皆春 天意實無別富貧 瑞日彩霞悉文理 何憂言句不如
人

延寶五年春王正月 實相禪寺方丈新成 老禪作頌 喜色發雞旦

始 腐儒綴句 慶事在雀賀後 鶯吟奏新曲美 人意感古蹟榮

傳鉢英才 斐然弄文玩辭 掛錫俊逸 卒尔裁章成句 唱和來往

不止不絶 趣向多少 無窮無盡 詩談禪談雖不異 道學俗學何

相同 不立文字 祖宗向上之論 不貴浮誇「(ハ)

教 利口可惡 多言可慎 欲達思想 又搜聲韻 已非古風 更

無新奇 強姜手揮秃筆 上丹山老禪及二英才 嘆嗟方書無醫詩

癖之藥 慚愧老師有忘吐哺之失 一言難著野情 十韻猥連粗句

玄陰盡處屬青陽 隨例士民祝蕃昌 短韻數篇求古意 高歌一曲賀新

堂 詞源活々西江水 心地悠々無盡藏 妙理金聲尤正直 清談玉露

不荒唐 筆花忽發實相美 文「(九) 采自呈瑞境祥 好學宜憐君子

操 輔人常喜丈人行 顏淵如愚却隣聖 何得多才輒比方 維摩不言

終得佛 又非饒舌所商量 勿評儒釋異帰趣 貴賤華共勉強 默識

心通兩家法 空文虚説是笙簧

享題帰鴈詩韻上自反軒

主賓整々共歛呼 作字作行又足娛 何可以不如鳥 我生緘黙似衡蘆

又以前韻上自反軒

千仞鳳翔何得呼 百尋龍蟄最宜娛 可哀「(ウ) 飛鴈迷碧落 又下

寒江寂寞蘆

重用前韻抒下情 以上自反軒伏乞酬和

俗子隨人猥號呼 飛禽安已却歛娛 吾貪典籍遂無用 學得鴈銜一葉
蘆

戲贈春也

家小自然如釣舟 煉丹滿籙似仙丘 陶朱逸樂桐名業 合忘生涯多少

憂

写情一首上自反軒足下

致君堯舜竟無能 欲獨善身却似僧 案上「(ハ) 學庸余違背 公才

可勉濟中興

醫生春也 袖一詩來示 予披閱則昨日予獻明公詩之韻也 春也

不能作詩 必知明公之著述也 公与予雖上下之分霄壤 予於公

為道學之師 故不顧賤爵之踰分添削一二字 且以前韻再裁一章

獻足下庶幾憤排之萬一云尔

治國齊家勤可能 儒家何類出家僧 君看千古商周際 西伯起時二老

興

自歎綴詩而無可共議也 与坐隅之從者阿知波氏共讀以一笑

欲隨世態力難勝 眷戀妻兒退未能 出處苦心形色古 兩鬢白髮只新

增

本願寺徒唯法寺善海 好愛瓶中粧花 俗云立花 揚春花二大字而

請予記其事

萬物資生知乾元之純仁 一花已開識天下之悉春 依仁遊藝感草木之

榮落 得心寓手悟風光之遠近 千仞之岡縮坐間 萬「(ハ) 里之流

控目前 瓶裏山水則仙家之逍遙 胸中乾坤自儒者之氣象 可喜可樂

美哉善哉 又前覺之拈華後覺之微笑 於此可達可談哉

俗士惡聖學 或曰得疾病 或曰我已知之 其意欲割除 是古非

今之言也 雖無黨籍之禍 無偽學之禁 吾學之衰弊 至于如此

誠可哀可傷哉 感激之至 成小詩一章以自遣 猶不堪緘黙 繕

写以奉自反軒

「(ウ)

生涯事々与吾違 噫嘻因誰辨是非 若舍經學從俗士 如何日々道心微

古詩一首寫情以奉自反軒

寂々兼山老愚民 形容言語徒諄々 讀書竊畏古來聖 感節獨哀見在身 一技文章聊遣興 萬般世態不勞神 雲霞喜目思無盡 松竹對檐德有鄰 茅屋晝閑禽鳥樂 荒園日暖堇花新 徜徉亦似溫公意 閑適暫忘俗士嗔 自反軒中成底事 勉哉君是鉛中銀 况今任職非吾類 早晚可親君子人

「(オ二)」

桃花節

隨節桃花不失期 喜斟桃酒搜桃詩 文人適說桃源事 無及桃花家室宜

庭際花

半畝荒園獨遊敖 膝脚不疲目不勞 莫笑家微花木少 瑞香落處有櫻桃

會春也小亭賞尺地之佳興尊二客之樂事

窻前尺土閑 山谷勢形寬 道學清談靜 胸中天地安

「(ウ二)」

題利勝寺前櫻花落盡

萬木春來無不榮 榮□因事有芳聲 寺前蒼厭俗人見 勿々隨風分外清

昨題寺前櫻花落盡 住持上人辱賜高和 又以前韻奉呈案下 為

春晝止睡之一助云尔

春風次第盡華榮 今吹松杉只有聲 色即是空花亦了 寂寥自似定僧清

聞鳥有感

學文識字竟無功 共住世間獨鞠躬 求食「(オ三)」群鳥噪田野 誰人今日辨雌雄

松杉

次第融和遲日辰 一番花盡一番新 依舊松杉惟寂寞 却將春色感孤臣

眼花

滔々四海不知津 失路一生侵俗塵 世上春光非我事 老年自有眼花新

思來

薄材縣力又衰顏 識得青雲不可攀 唯願殘年無大故 君恩許我占清閑

「(ウ三)」

陳情

可笑腐儒苦信書 萬般違俗自籛籛 小齋老伴唯花鳥 日々一飯不願餘

右二首表陳情題奉呈自反軒

慣端午帖歎不聞今日之屈子 上自反軒劣材不知帖子之体格 惟學其意爾云

荆楚大邦幾萬人 一人實不識靈均 忠魂解否千年後 朱子獨知屈子真

兼山老夫与野口氏政方說修身之「(オ四)」事而書之令揭座上

物各有分數 勤儉身自修 勉量入為出 足已外何求

二英傑一老儒 會木因齋喫茶讀書 吁嗟玉川之歌鴻漸之經 非吾黨之所謂也 況玩數寄之器物喪丈夫之持志 尤學者之所惡也

今日味一碗之清茶 醒讀書之昏睡 討論大學論語一二章 以益知強志 快哉美哉 自是以前此齋為此美會者何人乎哉「(ウ四)」

未聞之 以後又為此會講書者何人乎哉 未知之 清談之暇忘懷于得失 裁一詩以自樂示主賓云

會友輔仁思不群 樂哉陋巷有餘薰 主人薦得紅爐雪 賓客論談復禮文

與澤俊信

秀才讀書求道 美哉 謹記愚夫所思學之要 以就正之 世上貧多務

獲之學 學則學也 非吾儒之業也 又略書論理之流 似則似矣 徒

有頓悟之氣象 而無及事之實功」(一五) 矣 雖書貫道之器也 在讀

書之人有善惡之殊也 其殊者天理人欲之別也 夫五經者上世道學之

淵源也 四書者孔門傳心之要典也 讀大學知學之正要 讀論語察隨

其人其事教誡之意 讀孟子明辨義利王霸之分慎思養氣擴充之論 讀

中庸反求不偏不易無過不及之事理 恐惧君子小人之趣向 則五經之

要不外是矣 誠哉 四子者五經之階梯也 宋朝學知利行之大聖朱

夫子作近思錄小學及四書註釋」(一五) 聖々道統見知聞知之實傳也

勉強讀此等之書 以為格知之先務 夙夜自篤點檢為躬行之實 則聖

人之徒也真實之學者也 不然則雖聞見博雖辨論多雜學也異端也 况

作詩弄文之徒不足論之 吁嗟學之差在何處乎 為己為人之別也 秀

才恕愚夫狂妄之言 照察衷曲 朝夕孜孜盡善則此道之幸也 縷々在

它人之面談 皇恐頓首

中秋有感 誰感四陰逼二陽 今夜暗昏無可觀 蕭條仰想國之光

九日不見菊 群陰漸長剝剛才 菊如遯世遂無悶 今日重陽猶未

秋色秋聲秋意哀 開 猶記菅神千歲

九月十三夜 檐前松竹霧中幽 從容心靜九秋月 猶記菅神千歲

自任陰晴無悔尤 憂 猶記菅神千歲

警學之詩一章呈自反軒 玩物」(一六) 喪志無益吾 忘生

學在求仁在明智 先辨義利制矜字 謾高論談却暴棄 節用擇友可檢身

從欲終損己 徒多聞見彌放心 要須事々慎誠意

井上吉治丈夫 先君拾遺太倉令土井尊公之外孫也 不幸早沒後

三回之日 寫哀慕嘆惜之情 賦詩一章誦于牌前 幽魂享否

質齊外祖自然純 學好正宗次第新 猶憶容貌詞氣善 至今特惜若斯

人 哭內詩一章 哀戚無文 唯述一家悲」(一七) 悼之情狀 列字以

代祭文云爾 幽神尚享 恨哉吾妻先吾殞 乃孃哭慟情難忍 二女哀泣雨無窮 牌合中心雲不

鳴呼 今日予妻亡後七日也 一體胖合情義不輕 坐立言動倦々 心 目欲微情 而哀戚充胸 不以故興物 而悲淚遮眼勉強抑哀 掩淚 賦詩述情誦牌前洩餘哀 幽魂知否 沒後不幾日 慕思如歷年 存心詞氣愛 入」(一七) 眼色容嬌 恨我 老衰末 嘆汝死喪過 每當門內事 哀淚更潸然 伉儷江口總子沒後五七日 習國俗之禮 隨浮屠之法 和蔬菜供 齊飯 招僧侶誦法華 非尹子誦金剛經之意 欲不違舅嫗及二女 之志也 適吟誦洩哀情詩云 詩云韻聲云乎哉 歌云麗辭云乎哉 幽神尚感焉」(一八)

魂無不之體歸也 猶感往事難持志 幽愁暗恨告訴誰 竊向牌子滴哀 淚 おもかけはありしなからの心して又ミぬ人となりしかなしき わきて猶老のね覚のかなしきハはたれ霜降さむき夜すから いささらハなけや霜夜の蜚とてもねられぬ恨くらへに 於戲延寶丁子十二月二十二日 予繼室江口婦人亡後四十九日也 佛氏所謂中陰之日數也 嘗聞天子虞祭之僭矣 今以為國俗 實 非吾輩之所可為也 雖然素夷狄行乎 夷狄吾聖之明訓也 聊 隨俗禮供素饌于神主之前云爾 又抒情裁詩薰一瓣之」(一九) 香 唱嘆以祭之 幽神尚享

要須事々慎誠意

和順齊家十六年 命哉捐館速歸泉 自今門內皆闕我 時恨時哀惘然
戲為

佛氏曾談十歲翁 儒門今有六句童 因迷時義開周易 枚卜正當得因
蒙

寄附康全寺田地之旨趣 代飯村覺左衛門
秀遠

長子飯村覺右衛門 戒名心月宗傳 生年八歲延寶五年丁巳七月十六
日没 去假康全寺內一小地葬之 嗚呼 悲之至悲 恨^(一) 之至
恨 老衰心惘然矣 命哉命哉 謂之何哉 予仕宦不知後來有何所死
何所 哀悼之餘 買農家之田地 添地主之沽券 永代寄附康全寺
以為彼祭尊之供且以為墓地之價 然則年代變遷之後 矜予此頑愚
勿移易墳墓勿懈怠奠供 予生涯沒後之意思不在他矣 故書券狀之後
以為永々之記文 与住持諄海老師堅約焉 老師以此傳後嗣不違失之
則予之望足矣

自警 閏十二月廿五日

「(一九)」

寂寞歲寒獨自矜 窓前感象見堅氷 治人脩己須知變 三復得心初六
恒

戊午元日

一年盡處一年求 人死幽魂竟不回 春色自新余意舊 強成賀禮却悲
哀

賡載自反軒試筆之二首

品物春來氣變遷 又吟詩句嚼芳鮮 可知今日三陽象 即是九三君子
乾

改歲自然有春色 我安吾分何可望 仰望天心氣象新 猶恨人間無物
則

「(二〇)」

續高僧鳳周上人元旦祝詩二章之韻

詞花早發筆端春 珍重歲初雞旦晨 儒釋一同情不異 洋々共祝太平
民

君賀優游天下春 老衰只感及茲晨 一齊和氣慶雲節 寂々自憐無告
民

戊午正月十一日賀具足餅之禮詩一首

城高池深獨難凭 堅甲利兵不必勝 君克務容民畜衆 近來古往有明
證

「(二一)」

皇恐頓首謹言 臣本草茅賤民 自七歲蒙先大君寶地院殿之恩養 至
今犬馬之齡六十二歲 殘喘不幾難必逢庚申歲今日 故敬因今日之賀
禮 欲報六十年厚恩之萬一 以所聞所見上言之 於戲 內外一法諸
葛武侯之言也 寶地院殿用之 勤儉修身古先聖賢之教也 寶地院殿
用之 容民畜衆孔夫子易師象之文也 寶地院殿用之 軍法之綱要
於師卦之外何求之信哉 天下之本在國 國之本在家 家之本在身^(二)
而修身之要則先大君用之 之三事也 尊君令公信此語 以
是齊家修身 則再起寶地院殿之名譽於今日矣 儒生以婦寺之忠不為
忠 尊君以匹夫之武勿為武 非分踰捫犯嚴威 不才忘已盡愚衷 春
良 皇恐頓首 多罪多罪

右一章已清書之 欲奏之而有故不獻之 嗚呼 不待卜筮得明夷之
象 又有考亭占得遯卦之意思 自是正當守坤之六四爻辭矣 明夷
之六四則坤之六四^(三)也 道之將廢乎命也

延寶六年戊午正月上元之日 江口夫人總子沒後百日也 嗚呼
年月易遷冬復春 哀情不變晝及夜 或欲憫乃孀之暗恨忍微暫時
之情 或為感女子之幽愁強為不意之興遊 隨事隨物見彼見此
皆足斷吾柔弱之回腸 欲著迷情至哀無文 惟書所思以成詩章為
今日之祭文 幽神尚享

悼哉死別早逾年 頻感往事獨自憐 沒後^(四) 會顏惟有夢 更憂
老癖更難眠

題金蓮寺

寺號金蓮近海瀛 東南萬里望中清 登山又感良之象 察得明王不動

名

題 令君城中假山

小島小峯裝小庭 花紅苔綠訝丹青 玲瓏怪石接城堊 體勢雖微如有靈

西尾城北藤井河西 松風十里平原 淨土真宗之院家 地号野寺
寺称本證 境内浩々乎望中寂々焉 三春之「(ウ三)」向榮 九夏
之納涼 秋冬之月雪 方外之思 可異塵裏之興 夏之孟來過于
此 愛看閑淡之綠陰 想像餘春之華麗 裁唐詩一首以遣鄙興云
尔

綠樹重陰段々濃 悠哉原野寺門中 曾聞躑躅春如錦 一望心知滿地

紅

端午

何逢佳節意悽々 艾葉菖蒲宜品題 欲酌芳罇對兒女 又因角黍憶亡

妻

西尾八幡神宮再建頌

代武庫令君

「(オ三)」

參州西尾城中鎮守八幡神宮 依舊規造新廟經營畢 遷宮成供榮盛設

醴酒 誦頌云

吉良莊内 西尾城中 萬歲鎮守 八幡皇宮 古木掩砌 老松參空

重屋朽雨 秘殿傾風 丹青已滅 莓苔自濃 壹是致敬 再造成功

仰祝當代 俯祈微躬 倍輝明鑑 聊照樸忠 神德光被 有始有終

家運介福 無限無窮

「(ウ三)」

延寶六年戊午令月令日

當城主從五位下土井兵庫頭源利長 再拜敬白

同神鏡銘 代武庫令君

虚中應物 妍媸無私 明矣神矣 實不可欺

延寶六年戊午令月令日

朝散大夫武庫令源利長獻之

同石燈籠記 代武庫令君

延寶六年戊午之夏 再建西尾城中八幡神殿 且新造立石燈籠兩基
致如在之精「(オ四)」誠崇不測之威光

獻皇明小鼓於八幡宮銘 代澤俊明

草木成形 當助發生 堯欽納諫 神尚感誠

延寶戊午土井家臣澤九兵衛源俊明奉 八幡宮

延寶六年戊午之夏 朝散大夫武庫令土井利長 再建封邑西尾城

中八幡大神閣宮 五月二十五日甲子上棟 六月十二日辛巳遷宮

越 十五日甲申利長參拜恭敬有禮 不肖土井「(ウ四)」家臣儒學

生員獻絕句一章于砌下 讚頌天皇德輝之曼乙 以實恐實惶稽首

再拜 大神尚享

聖學依神始我邦 兵家祈助仰高蹤 離倫絕類此皇德 誠是本朝文武

宗

題硯 多米自反軒需之

一卷之石 一勺之水 及不測及廣大 則海則山 依器察理盛德達才

則賢則聖 嗚呼 舜人也我亦人也 勿玩物喪志矣

筆墨相友 文林結緣 剛堅鈍靜 功「(オ五)」用無遺

示稻野氏

天下之事萬殊而理則一也 故堯授舜曰 允執厥中 文武異用而體則

一也 故益贊堯曰聖神文武矣 文武不二道也 於事於心少言其概

一刀兩斷 則兵家者流之言 兩人持劔相對 忽決死生 無疑無懼

一刀兩斷 則可成功也 疑懼則害事矣 微忿窒慾 遷善改過 克己

復禮 亦不怠不危 不謀功不計利 一刀兩斷 則可成功也 故曰

文「(ウ五)」武不二道 中庸所謂智仁勇同一理也 一刀兩斷 則劔術

之要須 心學之急務也 於文於武察之勉旃

三猿慎耳目口之像 代多米氏

非禮勿視聽言動 夫子所告顏淵也 作箴以制外養內 程子慎獨教人

也 此三猿像謹耳目口 木偶自然不發動也 暗合孔子程子之語 衆
人觀此象察此意 不違聖謨必應神慮 延寶戊午令月令辰 奉西尾城
八幡神宮

偶題

世變似波瀾 生涯如累丸 獨由吾道大 尤畏俗情難 慎法心恬靜
守分身定安 為貧不辭祿 自靖養衰殘

八月十五日水嬉于一色海畔不見月還

漠々水天一色濱 望中萬里賞心頻 何人此夜此沙上 靜視潮頭湧月
輪

勒具足襯 代松倉平藏勝義 倣古風十二韻

珍重縱橫齊整布 母氏紡績言諄々 拜賜^(一六) 亦思不毀傷 裁縫
敢作具足襯 存如望恩顏 晨昏恭己當貞順 沒則為歛衣 啓手啓足
寧投襯 居治忘乱固愚駭 事君致身吾心印 況丈夫無勇非孝 私
準母衣向戰陣 奮發聊勿謀死生 要立身揚名掩黷 嗚呼闔場殞命時
幸得掛首於鋒刀 其人若見之議之 願一笑比實盛鬢 魂以喜骸骨有
光 又是庶幾顯予親 慨然感慈愛之情 卒爾書激切之信 雖愧弗類
事此文 兢々持志加畏慎

讀微子篇

聲名赫々殷三仁 精義致忠入神 吾輩希賢無自靖 與衆同是放狂人

九日

節號重陽却肅霜 稻黃粟熟木綿荒 誰推剝理知時義 萬象靜觀柔變

菊

晚秋獨秀涉風騷 含露傲霜有節操 忠憤誰憐江畔屈 行休吾憐柴桑
陶

錢澤俊明英老東行 以警戒三復之^(一七) 意 易陽関三疊之曲
勿失柔兮勿失剛 察時審變要無殃 乾々夕惕為公案 吾輩自今戒括

囊

冬日即事

野草悉枯木葉墜 老衰益痛少壯悴 又開周易觀此時 澤無水兮明入
地

一村の庭のすゝきの霜かれになへての冬の哀をそしる

與人

諸葛孔明曰 臣鞠躬盡力死而後已 至於成敗利鈍 非臣之明所能逆
觀也 美哉此^(一八) 言哉 大臣小臣事君之道皆然也 孔子曰事君
以忠 子夏曰事君能致其身 亦固此言也 孔子子夏之言簡 而難詳
得其意也 蹇之六二曰王臣蹇々 匪躬之故 晦庵朱夫子以孔明此言
解此爻矣 夫事柔弱之君 事剛強之君 俱不外於此言也 嗚呼必如
此而 後為得臣之道矣 又語其本 則董子正義不謀利 明道不計功
之言 察之勉旃

齋居

「(一九)」

雜客不來自不煩 靜中聊覺本心存 伯勞饒舌有時聒 猶勝勉強聽俗
言

呈澤懋軒

別來不幾日 仰望如周年 賜一封手帖 為千里面譚 懌悅々々 承
明公多事紛擾 不得閱書 實可然也 前日所呈之一詩 震艮體認
則誠正之勤也 如予 邇來日夜優游 與從予遊之諸公 講論學術之
差謬 雖未有益於諸公 無損于吾 快哉快哉 教諸公之說話曰 学
至聖人之道也 知行不兼進^(一九) 則不可也 然今諸公誦孔孟程朱
之書 俛焉數墨尋行 而無事實者 以經学易博奕奇珍也 便是程子
所謂玩物喪志也 又見書之時 利聊無紛乱而已者 便是浮圖未派唱
佛名誦題目之流也 程子所非温公思中也 温公大濡也^(二〇) 程子猶不
貸之 況諸公乎 可思索之 嗚呼学之不明不正 實可歎也 程子曰
博学審問 慎思 明辨 篤行 五者廢其一 非学也 諸公讀四書近

思錄之書 而討章句訓解 則博學也 不會文義 不^(二九) 明字義 則來考正之 似審問也 於慎思之涵養 明辨之體認者 未見之 況於篤行之跡乎 然則諸公學業之不進者 始於不慎思也 不慎思 故為玩物喪志 類浮圖之學而已者也 誠可惜可悲矣 諸公過則勿憚改 孔子曰 學而不思則罔 思而不學則殆 詳味此語 則可識得為學之方也 愚狂妄不察事理 犬馬年六十二歲 漸恐多年之誤學 以所自警戒 議於諸公云々 明公起予者也 故記教諸公說話之始末 以質于^(三〇) 明公 亮察論之 有所不足者 佗日以書教予哉 憐薄質劣材之一歟 明公莫惜言矣 恐俱再拜

老懶吟

老來踈懶自然閑 因蹇却忘行步艱 尚欲推求安宅處 須先透得利名關

答澤懋軒

示諭一緘 成誦三復 欣々承冕疏卓之事 如明公了見 可載冕疏之卓也 不可疑焉 或人以為人名者不可也 中華及本邦以^(三一) 冕疏不可為人名乎 且冕疏者天子諸侯之冠也 不可無載之之卓也 嗚呼方技之徒不足責之 今日之儒士 以無知妄作為宏才 故臆度成如此不當之說 為誇于人 切察論語誨知之章 學干祿之章 近思則可無此等無用辨 明公謂何乎 無謂愚此言亦妄作 而責之 照察之所論張蘊古二十字事實不記之 佗日詳示及焉 明公柔儒之歎 混俗之思 予亦感歎 雖然是今日學者常談也 程子云徒悔無益也 慎思^(三二) 之 雖謙善道也 徒謙亦無益 而却自棄也 孟子曰 舜人也 吾亦人也 是不全 謙者也 明公孳々思此言 勉焉 紙尾不幾 不能縷陳 況天寒手凍難成字 頓首再拜

賡載自反軒賦雪詩 公著公忠我述我情

頻點枝頭作冶容 又飄柔質舞狂風 吾無酒興無詩思 思在游楊問學中

大雪

人卜豐凶談否臧 吾思困象玩時粧 遊郎^(三三) 歌客險而悅 綠竹青松柔掉剛

又

身屈隆寒如蟄龍 感時望景又恂々 雪誇輕薄小人美^(三四)

呈多米自反軒

謹啓 明公今日謂來而不來 恭承嚴寒盛雪勞身軀 家事繁冗妨休暇實可然也 雖然 以愚意識之 往聖既有一暴十寒之戒 身體之寒與本心之寒 大小為如何乎 家務之細碎 與聖學之廣大 緩急為如何乎^(三五) 俯欲聞明公存心之實矣 若又明公有游揚之篤志 而不肖無程子之嚴威乎 謾思孔門授受之溫和 而遺上蔡相傳之清苦耶 不審 片楮不盡心矣 頓首謹言

伊東源大夫求書小學大尾一章以揭于座右

汪信民嘗言人常咬得菜根 則百事可做 胡康侯聞之 擊節嘆賞 朱子終小學篇以此言 良有以哉 有此志者 可能辨義利也 入大學誠意正心之工夫可有効也 無此^(三六) 志 汲々于利害 則日夜雖誦聖人之書 有何益耶 所作悉為利而已 然則失己屈人 張子曰不資其力而利其有 則忘人之勢 潛思之 學者無咬得菜根之志 則淫富貴 屈貧賤 犯義忘分 營々于利害之鄙夫耳 因何學張子之言矣 又先儒議此章 云百姓不可一日有此色 士大夫不可一日無此味 士大夫甘此味者 定能料理百姓玩索此語 則不獨學者可咬得菜根而已矣 治國治邑者 亦不可不思此言而立此^(三七) 志也

歲暮即事

咬得菜根家事閑 優游卒歲獨無艱 因量出入財常足 世上紛華我不聞

又

歲暮勿々窮乏艱 多因安逸奢傲頑 老儒克己獨勤儉 不合世情自得閑

閑

歲暮拜 寶地院殿影堂思往事傷今日綴律詩一首著幽情片段明神感否
〔ウ三〕

膝行頓首拜尊神 神是三朝元勳臣 居敬行簡先慎德 制財節用克安民 影堂物象尚清儉 砌下風光亦朴淳 俯仰思君吾不作 可憐今日奢傲人

己未元旦

天道無窮貞復元 人明終始祝言喧 茅齋春事由來靜 況又病衰自不煩

又

謾粧賀儀是令色 強作新詩亦巧言 世上春情非我事 寒窓只喜氣候温
〔オ三四〕

又

春滿乾坤萬象優 感時安已決然休 堂前松竹宜相與 高韻清聲和不流

幽居偶題

茅屋自幽深 雜賓不訪尋 老翁凭几睡 衆鳥傍檐吟 日映竹磨玉 風和松彈琴 何憂無善價 惟恨少知音 更計安身事 遂空報國心 病來彌喜靜 世務倍難任

呈自反軒

謹啓 春來明公高堂之興趣如何 吾廬亦〔ウ三四〕得時節之温暖 檐前梅花十分向榮 梅花似旧年枝々新 主人比去春段々衰 強欲賞花家無酒肴 雖動詩興遂無佳句 欲高歌一曲由來不知歌曲而又聲唾 梅認說易非吾分之事 雖思以文會友以友輔仁之格言 而吾無文何人輔吾仁乎 所依在明公之起予也 梅前耻身 以一冊訴于知己 縷々亮察 皇恐頓首

題堂前梅

讀書窓下一株梅 氣象歲新十六回 靜對〔オ三五〕此花吾不作 年々因學好懷開

又

信哉梅蕊比吾儒 恬澹潔清似丈夫 不啻有文也知武 滿庭片々六花圖

得女孫

始得女孫喜不禁 自憐鞠育我難任 如何特立丈夫志 還為亡妻淚沾襟

答中島是貞

前月二十二日 寄著述一封 來即時有故不得詳覽 事實已告之 自後產女平穩乳〔ウ三五〕兒安全 漸心得靜 屢卷舒之文慕六朝之遺芳 有葩有藻字慕四家之餘流 作體作勢 善哉快哉 不識予之鄙猥称呼 踰分 故記愚之踈略学行 告實草茅賤氏章句俗儒誤宏才名 忝非拋俸弄文年々踈 何察蘊奧希聖 日々愚難辨義利 然而讀賢之著述 聊疑可議之 六朝之新奇 奇則奇也 惟尚浮華三代之古雅 雅而雅矣 悉是誠實 文選六十卷 不若大學一章 賢余力之日 讀伊川先生答朱長文書 可會之所願〔オ三六〕賢以好葩藻之意 易致篤實之学 則家國之幸 後学之慶也哉 某由來不能作字作文 惟以所思告之耳 若有可議佗日 教予面會之日講習討論不有益于賢 必有益于吾 綿力疲深 思妾手恐傾斜 不宜亮察 予雖不巧詩次韻牋末一絕 以附于紙尾 勿詩看焉 草木雲霞氣象春 觀文察理熟知仁 一年又是身雖舊 畏愛後生学日新

答中島是貞

再蒙示論三復成誦 歎才之美 佳哉々々 暫考警策 賢知張子四句之語 則知為学之要也 說召公玩物喪志之言 則知上蔡相傳之指訣也 誠聖学之要方也 学与不學 行与不行 在己不在人 吾又謂何

〔ウ三六〕

乎 可畏可愧 上蔡能言鳥之語也 強再賡載芸韻 以為和答之事尔
柔弱徒談程顥春 剛強未得伯夷仁 多年困學遂無事 形色空疎白髮
新

答自反軒

「(三七)

謹誦論文 珎重 雖文法未雅 然旨趣達理 有晦翁之家風 無盜竊
之邪思 欣々幸々 取議之條 皆得性情之正 自己雖思之不得議之
恐自銜之疑也 近日常學之作文 往々皆然也 初無趣向之實 謾並
字 而無可言 則盜簡策之句 補之以長為美而已 故始終文理不接
續 無警策無活法 惟喜俗子無學之褒 不愧儒生篤實之心也 孟軻
揚雄之辨 高年小子之論 予謂何乎 見明公之書 喜鉛中之銀 多
幸々 事々期佗」(三七) 日之會 皇恐再拜

呈自反軒

愚案簡達床下 伏乞電覽答中島是貞書 詳審議之 昨日以春也達之
一封子細 讀過之否 謾盜竊陳編 強財成長篇 嗚呼不知麗文巧辭
於道有害無益也 況不麗不巧勞心慮乎 昨明公之一篇 情得實理
多幸珍重 昨雖已啓之喜 明公起予之學 不覺手足之舞蹈 又言之
面會可說衷曲 皇恐再拜

答自反軒

「(三八)

繙緘詳文理 件々達理 議論得正 快哉々々 明公与愚仕途之班霄
壤也 然而學術之勞 吾有先輩之名 故忘尊卑之分 喜吾黨有明公
之才矣 如是貞學世間有小才之徒 皆然也 以聖學之正義如彼之學
似雄壯夫對小兒 女爭強力乎 不可勞 口吻却似有競爭也 所謂巨
海不辭細流之言思焉 近日來會可述子細 恐俱頓首

西尾城畔伊文川有牛頭天王神祠

「(三八)

土民以地名曰伊文天王 曾聞天王即素盞烏尊也
伊勢皇宮同一枝 文成和什武成奇 天神人鬼歸宗主 王代接統資始
斯

三月三日

吾慮意足世情疎 無酒無肴惟有書 俗士遨遊成底事 桃源高致在吾
廬

答中島是貞

示論一章 讀過一返 欣々惻々 第一件 武王之言 孟子之辨 小
子不可言於其間」(三九) 也 更謂何乎 鈞獵忍不忍之議 英才實疑
之乎 抑欲以倉卒難辨之事試予也乎 劉昆韓愈之事 似有可疑也
如后稷始生 殷宗夢說 東海孝婦 王祥水魚之類 亦然也 以夷齊
盜跖之論察之 則聊會其大体乎 先賢不議之 則如予暫見其語耳
雖然不通達 則吾知之不至也 哀吾知之不至 可愈格物而已 獵漁
之事 聖人祭祀遇人娛天理人欲之辨也 不殺則殺人亦仁也 不啻禽
獸也 斧斤以時入山林亦仁也 不」(三九) 復禽獸也 可觀春之發生
秋之肅殺 同一元之流行也 英才實疑之 則審察孟子第一篇 雖察
識之欲試予則無用之空文也 何費卑詞乎 老味乏語不能縷陳 亮察
頓首 猶期佗日面會 邇日目力昏倦 故使小子執筆

又答是貞

英才不以愚老為無似 再被論高意 珎重多幸 恭惟學學聖人也 切
問近思學之要也 學有緩有急 孟子詳說 今謂何乎 倉卒」(四〇)
讀高文 疑不先務矣 近世我國好名之俗學 朝鮮信使來朝之時 以
古來難訓解之事迹 儒先不明白之義理 問之 如何朝鮮人解之 故
答以不知 則喜曰我所問彼不知 以誇之 英才所示件々 難底之問
也 疑似俗士之問 故曰試予乎 反復思索之 武王所詰天降命天降
威之辨也 宋儒解釋明察也 聖人戒酒 釋氏戒酒之辨也 不待問而
英才知之 故有試予乎之疑以質焉 驚高覽 多罪々々 聖賢千言百
行 為己為」(四〇) 人之判也 天理人欲分也 英才念茲在茲 事迹
之異同不可疑乎 期晤語不羅縷 皇恐

哀詩一首悼山口上正老人 於戲上正与予同年受 寶地院殿土井

大倉君之恩祿 元和九年癸亥也 故有同僚之思有舊友之情 頃

年上正嬰形質之疾 下愚沈踈懶之病 不關外事遺忘世情似絕交

恐失禮 今傷物故想往事 勞筆黑從薄奠供于牌前」(四二) 幽魂

尚享

五十七年我識君 君勤講武我勤文 情如同學常無異 居在比鄰交不

群 聲氣存心惟惻々 容貌入目意紛々 向誰說盡江東舊 空望悽然

日暮雲

聞舍兄桂菴計

惟有老兄尊又親 訃音驚耳忽傷神 故懷同學同床旧 頻作多愁多恨

因

与大野氏市右衛門

自天子以至於庶人壹是皆以修身為本」(四一) 是大學綱領條目總斷

之語也 修身之業 何為先乎 在讀書勤學也 學以至乎聖人之道也

所以求道也 學術多端 記誦者學之舟楫 詞章者學之葩藻 君子所

以學者 為能變化氣質而已 誠意正心 是學之大用也 欲為誠意正

心之學者 先不可不知義利之分也 聖賢辨義利之言 今不及枚舉

就中先可務者 玩物喪志之訓也 制矜一字之工夫也 學者隨俗 好

珍玩奇貨 聲色香味 則於道逆行倒步也 遂不可得修」(四二) 身之

實乎 嗚呼讀周程張朱之書 一番可會者 其書雖存而知者鮮矣之

語也 可疑者孟子沒而其傳泯焉之語也 聖經雖遭秦火而其書終不滅

惟無其人也 至朱子 經書雖如大明中天 朱子沒之後亦無其人也

我國今日讀程朱之書講道 猶漢唐之人讀六經不知道也 實可嗟嘆

可恐恨 可慚愧 吾黨二三子違俗讀書議論者 似則似矣 是則未

是 野草之芳菲 不似山櫻之續紛詞藻言葩之美 不如禮樂樂華之」

(四三) 盛 石鉢一尺之奇樹 山頭百丈之良材 先聖之片言半句 後

學之千篇萬首 其材其用 其德其實 可合案之 然則聊可知學之方

哉 孟子曰所願則學孔子也 孔子曰不得中行而與之必也狂狷乎 士

人辨俗學之非 察此等之言 不惑俗流 尊信程朱 讀書立志 捨己

徇道 忘利趨義 明倫修身 則聖人之徒也 自是可希賢希聖矣 修

身之條目 載在方策 先不求放心 不正邪志 何語修身之事 不然

而惟事文章之英 無切」(四三) 問近思之實者 非程朱之徒 此外吾

不知之 朱子曰 勤儉修身之本 大哉至哉 實可為修身之要

書羅山子官反內貨來之說後

宜有威勢也 所謂權貴也 反報之德 又報之怨 不為正理故云 以

德報德 以直報怨 內女謁也 湯王曰女謁行歟 未喜亡夏 妲己滅

殷 褒姒破周 不可不戒也 倭幸亦然 貨賄賂公行者惡政也 好

利則亂之本也 來于請也 君子不黨 若有于請 則相共匿」(四三)

非必為小人書 云無偏無黨無反無側 即是王道也 此五過疵可克審

之 為政為法者所宜知而行之 莫負事可矣

右稻葉濃州刺史 請羅山林子呂刑五疵之說也 刺史天下之大老也

請求此說 誠有志哉 刺史 我君土井吏部郎中之自出也 謹繕寫之

佗后欲示吏部郎中君 呈家相多時富 林先生之言 予無間然矣 然

恐不學之人難詳其說 故贅愚言于其後云 謹考呂刑五疵之目 貨色

之二也 詳察其」(四四) 實 則起於不明義利之辨 而一利心五疵之

病因也 恐威勢詔權貴本起于貧利也 張子曰 不資其力而其利其有

則忘人之勢 報德報怨 范睢一飯之德必償 睚眦之怨必報也 常人

所謂德者 利于己也 怨者 不利于己也 是生於利心也 克己復禮

則天下婦仁女謁者 人不限美惡 而妻妾之言必聽之 其親族之言必

惑之 況於美色之所幸 難得剛腸鐵心 不辨黑白 忽變善惡 觀晉

獻公於驪姬 唐明皇於楊妃 可監之」(四五) 丈夫有孔明擇醜婦之慎

不可有女謁之過 況近日娶婦之家 不擇其資質 專擇其富貴 而欲

依婦之勢作威 依婦之財作福 則其婦家之言 不別邪正 必強隨之

是亦貧利也 倭幸者 以男色獲寵獲位 進美色獲幸獲威之徒也 其

言易聽 其謀易行 亦女謁之尤者乎 賄賂公行之惡 人能所知 而

人必所眩也 制節財用 謹守法度 何貧貨哉 孟子曰 非其道則一
簞食不可受於人也 于請者何人 譏諂面諛之人 常々來」(四四五) 巧
言令色 或悅以貨利之言 或誑以聲色之事 飲食之人飲食之人來交
之 玩物之人玩物之人來導之 則以其人為忠為才 為使已安 為使
己利 故其言無不聽之 世人知之 以利誘之使其人竊訟 則妍媸易
色 賞罰不當 此疵亦生于利心也 非公事未嘗至於偃之室之滅明不
必于請矣 吁 常々來悅之友 士大夫可慎擇之 孔子曰 益者三友
損者三友 此言詳察之 仲虺贊湯之聖德 曰不迓聲色 不殖貨利
宜哉

九日

節號重陽陰氣周 感時恨老竊悲愁 無詩無酒況無菊 正是吾心消剥
秋

答村田見朴

孟秋十一日書 孟冬初四達于座側 發緘審其意 案舊得其實 賢以
修業汲々 予以衰廢恍々 況土壤相去幾十里 無因聞震艮也 忽
得一封 又如再會 欣慰々々 賢久遊洛下學醫業 自後詣于大坂得
世醫見義之傳 今在松坂業醫治疾 佳哉々々 賀」(四四六) 不違素志
尤信後生可畏之語矣 往日會岡崎之僧尋西尾之愚 聽安否 詳在亡
予聞之 喜厚志 感往昔 又承修業之暇 講習儒書 討論聖經 則
是尊德性道問學也 處已治人之方 不可有兩途也 先哲已云 醫國
如醫人矣 不懈 則療風寒暑濕之疾外 更治頑愚暴棄之病 某犬馬
之齡六旬餘 窮鄉無師友 下邑無治政 惟數行尋墨 養殘喘而已
或對二三十卷典籍 竊思四五百森風俗 可憐々々 劣材緜力 倦作
書弄」(四四六) 筆 草々呈數字答微意 事々亮察 頓首
賢有兩男子 善讀書 實可褒可羨 教誨不忘 進修不可計

賦庭際純坤象

殘菊寂寥悉委霜 滿庭黃葉聊含章 偶然喪我動詩興 觀象感時又括

囊

答懋軒澤老

忝蒙示論 慎詳其意 愚案簡二本返賜之 明公褒寵之語 子細熟讀
了汗顏 雖然文王謬芻蕘 孔子聽滄浪歌 聲入心通之流」(四七七) 匪
耶 見不若孺子歌愚文 達之 況於經書耶 冀去無用之繁文 從事
于洙泗濂洛之君子 切問近思 察緩急得失之機 孜孜不忘 則吾道
之慶 吾君之幸 吾黨小子亦大福也歟 縷々亮察 頓首皇恐

延寶曆己未冬 建子月第二日 祭江口市丞幽魂 市丞者予二女

子外曾祖父也 初屬前田家 前田氏與佐々氏戰之時 一日斬二

隊長 勇功拔群也 後仕蒲生氏功許多也 或見敵之」(四七七) 士

卒有異粧者 曰取來 進必斬其首來 不二三也 故主將賞其勇

敢 戲賜號曰取手助 使鍋蓋為旗及幕之紋云々 今後裔 唯有

兩女孫 聊奉其祀 哀哉 薰一炷香拜牌子 誦一章詩代女孫

幽神感否

一代勇功冠其國 國人呼氏仰芳馨 哀哉唯有女孫祀 江口武名而忽

諸 維延寶七年己未陽復之月四日 亡妻沒後三回之辰也 賦一絕以

為祭」(四七八) 文 幽神尚享

惻々情懷不得蠲 愁花恨月已三年 牌前哀我我無語 二女明粧共覺

然 奉祝

我君武庫令君沈痾頓愈且賀 吏部郎中君如入西尾城之詩

時是一陽來復辰 我君亦是快然新 城中喜氣如春色 次第溫和及萬

民 庚申試筆

春到乾坤萬化中 象占靜察悉長蒙 我今年數六十四 理勢共知男子

窮 窮

動靜無端終復始 三冬未盡一春倚 紛々輕薄世間兒 爭知陰陽消長理

次韻山崎正勝新年試筆之韻

字似朝來一片霞 意通陽德滿天涯 新年景象何求外 姑舍百花愛筆華

和阿知波崇教生歲旦詩韻

新正弄筆賞心新 自是漸々陽長辰 世上(四九)繁榮非我事 儒林更有樂花湊

答自反軒

謹成誦新年之賀啓 珍重再拜 欣々幸々 元日辱被枉高駕於茅齋 憐愚疲勞 早過門前 故不拜嚴顏 不述卑禮 皇恐危懼 不佞試筆之惡詩 畏罪禍 却蒙褒賞 過當過實慚愧 由來不識漢魏之芳潤 不達唐宋之英華 徒慕程朱之高風 不知聖賢之微志 實似是而非之尤者乎 最可惡也 某脚疾 雖無痛楚危急有餘之苦 然有痿痺緩(四九)弱不足之患 遲日暖風壯快之節 必免今日之難洪 其時其日以拜高顏可述鄙情 羅縷難著楮上 亮察 明公歲旦佳作 拜誦觀感 倉卒汚芸韻 奉呈足下 比兒童興遊 以勿勞高覽 舊年明公讀周易 故結句以先後天之語 正朔佳詩似記真 細看字々得心新 後天即是先天易 須識三皇上世春

答澤懋軒

開新年一封 知舊友三復 新年氣象 舊友(五〇)意思 同得陽和之德澤歟 可賀焉 可賞焉 承明公欲讀朱夫子綱目 美哉善哉 一識春秋傳心之大意 一察古今治亂之事實 知所損益 詳所因革 家國齊治正道 明公心疾奇方 共可得其功效矣 楮末六十餘歲夢中之語 慎考察之 為悔過乎 為自棄乎 徒悔非不篤行 失身之惰夫也 實知過不憚改 克己之豪士也 兩途在敬怠之間矣 我不強之

公自擇之 愚述新曆懷之惡詩 和山崎氏之病句 明公見之 被許可文(五一) 理明白矣 以禍為福 幸々 某脚疾 雖春陽大和 未有益衰老之軀殼 猶聖言謹嚴 更無裨暴棄之氣質 昏惑尚可治 廢疾不可治 可憐矣 綱目首卷 在大野家 執之觀之 讀了之後 有所疑則議之 病手不快執筆 短才不巧作文 艸々不宜 縷々亮察 皇恐再拜

和嚴室生試韻二首韻

大寒節裏歲云新 茅屋華堂喜氣均 感遇學生當立志 一元理本在人身

「(五一)」

次第三陽叔德申 偶然萬姓賀芳辰 徒貪花鳥勿荒志 荒志放遊鮮矣仁

和野海折子生試毫

一年乘處一年除 陰氣漸消陽德舒 醫是陰陽和順術 遙知安宅在窮廬

答自反軒

昨尺牘墮手 不異面論 廼時家事紛々 欲伸言而心躁妄 故遲々更勿訝也 一昨人日 風雨電之變 為偶乎 為怪乎 古來術數家以人日雨暘卜吉凶 為正乎 為謫乎 天(五二) 變地妖 春秋必書之 綱目謹記之 先聖後世不為偶尔也 雖然如此疑議 不可以概論之 惟在以心會之 洪範書同 而箕子武王所得 漢家諸儒所傳 不同也 前日汚高韻之蕪詞 俗人不可必以詩見之 明公謾以隆師之美辭 羞虛譽過實矣 開歲之後 未拜嚴顏 瞻望多多 承明公禮文之繁擾 以恭乎 以偽乎 不知之也 古云大夫不有君命則不越境也 然則讀書不切乎 君不忠乎 事實期面布 又承澤氏一篇 明公(五三)亦讀了得意也 多幸々々 老廢脚疾未得復本 終日兀坐 尋行數墨 不聞外事 不識世粧 却似清世一閑人 實天下一罪人也 可憐々々 十二三日之後 明公公暇 被扣衡第 必清談細評前後天

一理之思索 程邵子異迹之會得矣 寸丹雖長 片楮難述 所告止此 皇恐再拜

答倉光焉求子

便書入手裏 恰似得面會 貴翁雄健 門族平安 欣々慰々 開春之吉兆 萬邦之幸慶」(ウ五三) 可賀焉 可祝焉 某病身無他又添年 二女及一女孫安穩 以是為生涯樂耳 承旧冬渡子容大病 新年漸効驗 次第必可平復也 幸々哉 雖然鬚髮齒牙衰廢 可惜可憐 後來保養 畏懼勤慎 則可也哉 去年命我之論書 圭復不措 詳其意思 知舊友之情切々 感刻々々 猶有所疑 假筆詳問 孟子既曰所願學孔子也 學者所學之要 修齊治平之事也 是則孔門傳授之法也 程朱雖學拳子業 生涯以學業 不為實得」(ウ五三) 故有黨禁偽學之禍矣 鄙才非比程朱 所願欲學程朱也 子細拙文之非所能盡也 仰希亮察 又承賢次女舊冬成嫁禮 珍重幸慶 老懷頻羨之耳 加納西尾水遠山長 何日晤語 頓首白

賢息源太秀才郎學術修業乎 氣象進德否 國珍塩鱒拾尾惠賜 公以為朽物 子以為新珍 欲謝厚志 難著片楮 艸々不宣

復中島秀才郎

」(ウ五三)

昨所貺詩序一篇 子細省察觀秀才文辭進於舊年 知勤而不倦 嗜而不舍 書中件件 悅目慰懷 惟所惜者 似闕慎思明辨之工夫歟 我一日長於秀才 不耻偏執 不顧無禮 以無用之贅言 述所思也 勿惡卑狹矣 術數之學 不若先天之象數 邵子之數學 不若程朱之理學也 於乎我邦學業 古來不得其正 秀才稟賦之清高 能讀濂洛之書 而尋洙泗之理 捨俗學之邪 得性情之正 我學之幸也 我黨之慶也 不肖常」(ウ五四) 常所思在此而不在他也 吾言不有益于秀才則有益于自省哉 餘埃面布不宣 和秀才述情之小絕 著後生可畏之鄙志 勿以詩見焉 和曰 文嗜深長味 知畏君子畏 春又入毫端 朶雲富且貴

正月十一日有感

盤遊酣歌謾冥豫 培克面諭自称譽 時世粧吾不欲觀 告朔已廢羊亦去

感獨善牕頭梅花

梅樹枝頭春色新 此花潔白似清貧 可憐」(ウ五四) 寄寓非其主 寂寞獨知寂寞人

又

梅樹迎春生意回 主翁送歲老衰來 觀花祭已最羞惡 草木不默人却默

答自反軒

昨賜手柬 時在壻家 還則點燈 故不復書 遲々恐々 梅花一章 雖畏詩禍 既作之後不可隱諱 却蒙褒賞幸哉 嗚呼知我者其惟明公乎 罪我者其惟明公乎 又梅花一首寫別幅呈足下 乞細評矣 前日所約丹」(ウ五五) 砂墨一笏惠賜 多幸 磨硯染毫 嘗口則精神明潔 點書則句讀辨別 無煅煉之勞 有齊整之功 則變道家之虛誕 以為儒門之實用 快活々々 迹日面會 可述縷々 皇恐

呈倉光焉求

板橋氏之壻家 遣价于舅氏 聞其便 喜其的 揮毫汚尺素 綴字達寸心 想像貴体 茵裕勝 家族長幼安穩 佳哉幸哉 某無它事 雖坐立不快 好書未倦 類霽塗魚 養殘喘 大体已啓于前書 迹日病床讀文定春秋」(ウ五五) 雖不達蘊奧 案朱子綱目例 強讀了耳 文定之文難讀 不如晦翁之文易讀 枉勞心 甚費日 學文之淺狹乎窮理之疎卒乎 可笑可憐 雖然大義明如日星 子細案之 亦天理人欲之判也 尤知齊桓晉文之功 仲尼之徒不道之也 不讀春秋 至于今日 無災無罪 誠幸哉 老兄謂何乎 猶有所思 則以書教誨之 以為面命 激厲自己 勿惜言 勿勞書 皇恐頓首再拜 澤君懋軒之新亭 故老臣堀江氏之」(ウ五六) 舊宅也 賀広厦之美

祝寵擢之榮 不乏其人 謹讓于諸人之口 想像所闕者警戒之言也 予与澤君雖尊卑分殊 講習漸磨之益 似有同学之好 故作警戒之詞 以供于電覽

可憐舊主不知幾 自取敗亡張福威 温故知新君克勤 後鑑不遠在前非

落梅花

風吹梅花片々颺 滿庭粧出新圖樣 雪霏蝶舞柳絮紛 知是遊魂為變狀

贊伯夷叔齊像 拾聖語以書聖學餘流

〔(五六)〕

孔子曰 伯夷叔齊不念舊惡 怨是用希 求仁得仁 又何怨乎 不降其志 不辱其身 餓于首陽之下 至于今称之 嗚呼中立而不倚強哉 矯者 伯夷叔齊與

贊八幡大神

始讀魯論治我國 貽厥孫謀有仁德 世人惟尊威武嚴 不知文明不可測

書明商輅四季之後

敬寫商輅四時詩 性情之正最堪玩 俗士〔(五七)〕文字韻聲同 自有天理人欲判

書朱子泗水尋芳詩之後

讀書以求仁 由己豈由人 萬物備於我 謹嚴篤反身

裁母遺服造鎧下相子 代大野市右衛門

慈母遺服 感恩傷情 準鎧作相 操心不輕 存當思愛 沒欲揚名 我雖無勇 取義舍生

吊多米甚五右衛門大老詩二首 聊洩哀情 從不腆膊 供于牌前

幽魂尚感

〔(五七)〕

行道立身功未央 君臣相喜水魚情 平生威福今何在 牌上空存沒後名

六十六年馬蹄颺 忽歸泉下脫塵凡 美哉貽厥能成德 肯搆肯播事々嚴

跋敬齋箴

敬箴十章章四句 士人讀之可戒惧 希聖希賢基在茲 視聽言動惧法度

与松倉義勝

學問之道 欲修身也 其要在先求放心 心不在焉 則視聽不察 作為不正 今日之學〔(五八)〕有 不求放心 惟求名利 所讀者聖人之書 所行者與聖人之教背馳 哀哉 強好辨 徒恣論 或銜己 或毀人 貪利慕名 称尊信聖賢者 正邪不待議之而明也 學者不於此而克己慎獨 勤不倦 則學庸語孟皆可為己之有 以責人之心責己以求利名之心求放心 則雖不中不遠矣 而後可希賢希聖也 噫

多時元丈人今茲三月卒于三州西尾 葬同國矢田邑養壽寺 越四月十一〔(五八)〕一日 初忌日也 令嗣率工 經營塋宅之基趾 予侍側不覺悲哀之至 裁詩一章以為淚從云尔

悲嘆老友捐同群 警效存心又不聞 淚濕白髭思往事 哀情更起一堆墳

みれハまつ涙そもろきなき名のミそれとはかりに残るしるしを 題扇

上實下虚斯巽象 宜哉動處忽生風 翻轉靜察則成兌 隨用微涼能悅衆

古風一首感故人遺物 〔(五九)〕

生涯如寄速如馳 逝者固悲殘亦悲 况又旧朋遺旧物 感嘆開幅更磨眇 牡丹花下遊鸚鵡 氣象可嬉却堪嘻 鳥恨別兮花濺淚 慨然吟了

少陵詩 故人於我必勤益 徒對丹青勿荒思 見鳥慎巧言多譎 望花恐令色終危 澄心察畫圖生意 生意無窮也是師 欲写愁腸頻拭眼

慇懃涉筆述哀詞

多米時元墳墓の地にまふて、

櫻花散しきしより 卯の花の垣根もあたに 藤山吹の折過て 沼の
あやめかきつはた それかあらぬか^(ウ五九) まかふまに 花橘の時
にもなりぬ 逝川よりも流てはやき 年波五月の一日といふ けふ
ハ消にしなにかし 多米氏といひしますらをの七々日にあたりぬ
からをおさめしところハ 歌体翁の浅茅色つくとなかめて あらち
の雪のおりふし思ひやりし それにはあらぬおなし里の名の養寿と
いふ寺に^(ウ六)南有ける 其所にまうて、 四十あまりの年月なれこし
昔思出て あはれとおもふかきりの心さしを かたハしはかりかき
つ、け 哥とかいふ物の文字の数はかりあハすることになむなり
ぬ^(ウ六〇) なきたまもおかしとやきく

残なく残らぬ道としりつ、もまつなき人ハまつそかなしき

五月五日おもひやりて家につかはしける

けふ君か軒端も露のしけからん昔かハラぬあやめなからに

時元墓誌

延寶庚申年 季春十一日 多米甚五右衛門時元疾終於家 六十六歳
矣 君愛惜之 族哀慕之 或歎其志 或感其恩 嗣子時富涕泣 屬
吾以誌於墓矣 謹考多米氏平姓 其先勢州人也 初康正長祿之交
多米權^(ウ六〇) 兵衛尉 与北條早雲謀立身趣東州 漸立功後號玄蕃
子周防 事氏綱 共攻城野戰屢有大功 而後相州小田原之渠魁也
子亦號周防 事氏康氏政有忠義 何時賜武州青木城 天正十八年
小田原滅之時 周防出軍于上州西牧 守城支敵 防戰盡術 與衆效
死 枕城闕沒 不耻名 不失節 子外記先父死 外記有二子 甚五
右衛門 助左衛門 助左衛門諱時安 小田原滅後奉仕家康公 後屬
佐倉城主萬君 萬君卒後 仕^(ウ六二) 松平上総介忠輝君 忠輝君有
故被沒収采地 而時安仕土井大炊頭利勝 時定時元其二子也 時安
沒後 時定戮人奔 時元從之 兄曰 同途不可也 則別去 路遇

仇家人 執兵迎時元 時元罵曰 汝迷亂乎 我非仇也 被走向他

而後草裏腰刀 如匹夫負物 追者遮前躡後 暫隱草茅中 追者急探

草中 抽刀出草中曰 我不可逃也 汝衆多戮予 不可為勇矣 共到

城下 聽命自殺 僉諾曰 納刀 時元曰 衆先納鎗 而請甚飢路^(ウ六二)

請以竹木為劍實 如挾兩刀 衆感其言 如其乞 時十七歳也 衆詳

告家長寺田時岡 小節雖不足記之 弱年倉卒詭計 亦可謂奇材乎

時岡竟賞其志 寛永癸酉登進使仕利勝 利勝卒後 屬利勝次子兵庫

頭利長 事利長夙夜不懈 志合氣齊 最被親近 恩遇日厚 故言聽

計用 寛文年中以時元為家長 而士卒之號令 農民之租稅 府庫之

出納 邑里之法制 隣^(ウ六二) 鄉之交際 閨門之饋食 悉成于一人

矣 領食祿一千石 吁嗟武侯王佐才 猶自比管仲樂毅 義利之辨未

精也 端末言語科 仲尼教工利其器 仁賢之人難用也 時元其質朴

其志直也 公家之利 知無不為 事君之道 盡九二之象 時元用之

知時耶 知分耶 惜哉 事賢者友仁者 則可企望武侯之事 使君勤

臣儉 民有恒産 家饒財用矣 無爭友 無良朋 不有激厲漸磨之助

時耶命耶 得君其專 而功烈不崇 管仲猶如此 而^(ウ六二) 況不為

管仲者乎 子時富好誦典籍 与父同任職 進德修業 勤不倦矣 雖

未見其功 事君致身之志 能繼父志也 立身揚名 成父之美 孝

也終也 已立石勒事蹟 又慎身果令名 美譽可以實 善政可以称也

銘曰 惟多米氏 系出自平 東關豪族 北條遺英 先祖雄偉 其勇

已明 後裔或困 厥業克亨 時元壯志 欲振家聲 事君既重 為已

何輕 未察道義 最有功名 接下恩愛 教子忠誠 令嗣克勤 必期

玉成 斯人雖沒 儼然如生^(ウ六三) 次男時久 以恙寓兄 友于不

懈 孝弟於貞

題視聽言動箴後

与阿知波氏

欲志道先求放心 詞章雜薄勿貪淫 孔顔傳受程朱學 一番工夫在此

箴

題道統之圖後 与山崎氏

仰觀道統圖 俯察聖賢謨 言与行相顧 此真君子儒

延寶八年六月二十三日 多米時元没後百日也 前日應令嗣之請

誌于墓矣 今日亦詣墓地養壽寺 感光陰」(ウ六三)之速 写衷曲

為古詩八韻誦于牌前 幽魂謂何乎

不才似社櫟 無用當閑適 如何徒弄文 饒舌遂類鵲 尚誌故人碑

詳考先代績 攻守屢勇銳 艱難備經歷 序事恐樂天 性情無邪僻

執筆思至公 毀譽勤分析 感時竊惆悵 恨風頻怵惕 侃々老夫淚

更為時元滴

七月十日拜先君原廟 賦古絶二首以為祭文 乱雜不成章 惟發

思昔憶今之志云尔

」(ウ六四)

質如晏子更温良 才比蕭何猶有光 必察民勞貪政刑 克明君德使平

康

元和寛永善流風 任能賞功勉顯忠 拜牌吾今思底事 元和寛永善流

風

論學

君子之學習 則為達才成德也 非記誦文詞之事 故治世之取人 在

才与德 後世以文詞取士 与治道無干涉 然以文詞猶可也 若一變

則至于道 本朝聖學不明 中古惟以文取士 世衰学廢 風俗日下

以学文」(ウ六四)視同醫陰 必計利 信為智能 況今以便俸利口為才

以善柔諂巧為德 聖人所謂損友也 小人也 世變如此 學者謂何乎

惟感時憤己 違俗立志 不淫富貴 不移貧賤 則純儒也 實學也

學者必察義利 無悖道以于譽貪利矣

八月十四日一宮といふ所にあそひて いつしきといふをもの、

名にして 秋の哥讀侍る 三河ふりのうたにハ言葉つ、けりや

つ、かすや

」(ウ六五)

月におもふいつしき嶋の国となりし昔もかくや秋の氣色ハ

八月十五日 月をなかめて なにかし多米氏の身まかりて と

りわき哀さの秋の空こそをおもひ出らんと思やりて 家につか

はしける

ともにみし人ハはかなき秋の空月やあらぬとさそ歎らん

見月感學

今古一輪一樣秋 隨情歡樂又悲愁 讀書誰憶濂溪象 玩句徒貪赤壁

遊

和自反軒主對月憶去秋之韻

清夜悲吟號泣天 月前一曲想夫憐 感詩」(ウ六五) 欲説家人恨 哀思

秋情共慘然

与人

末世道喪 邪異蜂起 邂逅讀書者 不得其中 或語於記誦 或溺於

詞章 或流於功利 皆非善學者 此不及者也 又好閑散寂靜者 多

入於禪宗 此過中者也 又豈善學者乎 嗚呼讀書者 先察義利 必

明虛實 不為玩物 不為高大 以修身為要樞者 必至於道也 修身

之方 布在經傳 勤与不勤在己 而不在人也

」(ウ六六)

示野海三折

大凡人有恒產者有恒心 恒產亦不可不慎也 野海氏之子 學脉子之

術 業外科專門之事 自號三折 思三折肱為良醫之義乎 可謂其志

勤也 又讀易鉄撻三折者 孔子也 欲折肱為良醫乎 欲讀書為賢者

乎 資生之方 求道之勤 雖似異途 天下之事一理也 以仁義之心

治病 不計利 則判藥煉膏 皆不外易之利貞也 惟計得失之分失己

不思義 則學易講書 悉不異商賈之」(ウ六六) 貪汚矣 兩途則天理人

欲之分也 公私之判也 野海子擇之 書之以為說 又警戒之

名外孫說

延寶庚申 九月九日 馬場昌信生男 予為外祖父 故使予命之名

則以生日重陽 號重九郎 辯曰 以數謂之 九乘九則八十一也 以此數祝汝壽考 以象謂之 乾卦之象也 象傳曰 天行健也 汝自強不息 可希聖希賢也 以理謂之 剛健中正 富貴不淫 貧賤不移 威武不屈 是乾之德也 以占謂之 元亨利貞也 以變謂之 見群龍無首吉也 如此則(六七) 無九龍之悔也 汝成人之後 屬明師良友 以講習討論此語 而省察克治 乾々惕厲 則可無悔吝 可壽考矣 外祖父井川兼山春良也 其先尾張舊族也 本姓源 氏纈纈 中葉改澤田氏 仕斯波武衛家 後胤屬織田氏 織田信孝卒後 祖父宗祐為洛下潦倒之翁 父政勝後號宗与 冒母家氏称井川 今年予六十四歲 不期逢汝成長之時 故記大概以遺之云尔

書土井利勝系譜後 草稿遭丁酉災今存
系譜清書故加此年

—(六七)—

利勝事家康公秀忠公家光公 執三朝天下之權 故禁中之法度 武家之政令 戎蕃之貢職 寺社之規式 農民之租稅 商賈之売買 無不預聞焉 百官称其人 四民仰其德 然利勝猷系譜之時 惟書君恩之辱 不錄有功之事 故平生之勲勞 不得記萬之一 尤為遺憾矣 秀忠公薨御之後 或譜利勝謀叛 家光公暫疑之 或以賤汚侮之 或以威武屈之 利勝無幾微見言面 一日不止出仕 進思盡忠 退思補過 家光公終感(六八) 其誠 疑心氷釋 君臣合体 利勝非豪傑之士者 使君能如此乎 嗚呼實君子哉 良相哉

書說忠臣貞女後

王蠋曰 忠臣不事二君 貞女不更二夫 蠋說君臣之事 以及貞女小學入夫婦之篇 然則臣之於君 婦之於夫 其道一也 吁今士大夫無克識此語者 婦人(蜜)通他夫者 衆皆賤之 而國有刑法 娼女既以類禽獸 不足議之 男子事君者 無盡已勤職之實(六八) 託權臣以干祿 遊大名之家 以為資威權者 婦人密通他夫之類也 術士及俗儒 遊數公之門 得家々俸者 娼女遊女之類也 如此人 不知耻之甚也 何獨責陰柔之女子嚴 而不責陽剛之男子歟 邂逅讀胡氏

女而自媒 求貞女者 賤之 士而自薦 求良士者 輕之之言 益有所感以記焉 吾黨學者為如何 書以俟議論矣

辛酉試毫二首

豐瑞先臻辛酉天 門前松竹雪蒼鮮 八洲(六九) 依舊維新色 神武明君革命年

又

春入小園物色和 暖風吹面考槃過 皞々竊憶三皇象 短韻自擬擊壤歌

和崇教生雞旦韻

新君即位頌聲謹 一藝有名遂可干 春德融々光被節 詩篇何似孟郊

寒

有感

丈夫進退可謀初 貴賤窮通常乘除 申白猶疑穆生醴 慨然感我感權

輿 —(六九)—

延寶辛酉年正月 拜 實地院殿原廟 予七歲以讀書 始拜嚴顏

即賜月俸 今茲六十五歲 行步艱難 殘喘日薄 不知明年正月

復拜此廟 竊歎今日風俗頹敗 更憶昔時治教休明 綴古詩一篇

頌盛德曼乙 擬祭文 誦堂下 明神尚享

慎思元和治平倅 君如鳳凰臣鸞鸞 君德寬仁豈易量 臣矜細大明

清濁 於戲對誰語精微 聊記綱要遺后覺 先憂後樂志忠(七〇) 純

左輔右弼勤機斷 愛民薄斂禁奢侈 用才任能躬吐握 真田征役克使

令 大坂軍旅謀帷幄 威儀棣棣惡面諛 言語恂恂喜質慤 謙遜常耻

不讀書 使子夏論謂必學

岸龍丈人被寄具蒙今年蕪詩之酬和 幸々 老昧薄智不記賢詩韻

故再用蕪詩之韻以謝厚志

雲霞草木一新天 天運人心氣象鮮 何世丈夫無自得 鄙生最祝太平

年

一曲詠吟淑氣和 快然頗喜碩人邁 後世」(七七) 謹慎勤無懈 清世以來聽舜歌

和嚴室生雞旦詩韻

弄筆裁詩又祝年 雪花文字句其翻 悉依東帝仁風大 次第春光可共權

答倉光焉求子

誦開歲之賀章 承明公親疎無恙 嘉幸 舊臘澤九兵衛以書之次 被達老昧平安 男孫生之事 今賜慶辭 珍重 明公次女弄璋之賀 至祝々々 去年明公大病 雖然醫術奇効今安全 千喜萬悅 察家門新年之喜」(七八) 色 為家為學 彌保護無懈也 近藤澤兩家姻婭之子細 被審述之 猶語澤氏 則澤氏可悅也

一新將軍號令嚴重 酒井雅樂令廢黜閉居 議論區々 邊鄙之某不知巨細 然舊將軍柔弱 威福全在下 今日威福悉歸上 雖不知後日成就 以洪範文考之 可謂美乎 雅樂令昔日之非不謂之 以近日論之 舊將軍薨之迹日 雅樂令以傀儡子賤民放下之戲 視不豫彌留之君 以強年之大君 為無」(七七) 狀兒童之看 無禮無法 謂何哉 況又薨之日 亦在遊宴之席 雖急遽至殿中 聽遺命否不分明 以綱目之書法斷之 則此一事 投于四裔 不為不幸歟 且新將軍悉不廢舊老 不登在邸之臣也 所撰二三人 世以稱之士 而任使得其器也 以中庸九經論之 雖曰未尽美 比前代則可謂智勇乎 愚臆度如此 後來聞明公子細之議 幸甚 新年燕作二首寫別幅以呈之 後便賜筆削 恐惶頓首

題山水雪景畫軸

望清潔仰伯夷潔 感栗烈畏文定烈 美哉隆冬盛寒圖 又憶伊川門外雪

號嚴室畏三說

學問之道 在知其要而自得也 羅仲素得於豈惟口腹有飢渴之害章

呂祖謙得於躬自厚而薄責於人章 吾命汝以畏三 孔子曰君子有三畏 畏天命 畏大人 畏聖人之言也 天命者 天所賦之正理也 順理則裕 從欲惟危 孟子曰 人之所以異於禽獸」(七七) 者幾希 記曰 人而無禮 雖能言 不亦禽獸之心乎 畏心一息間斷 一變則為夷狄 再變則為禽獸 實可畏也 知天命可畏 不失所賦之理 戰兢自持 尊嚴大人不敢易 佩服聖人之言惟恐違 旦夕不懈 則習与性成 聖賢同歸 然則君子所畏 非利害得喪也 非毀譽予奪也 非死生也 學者可思之 畏亦敬也 敬主一無適也 齊整嚴肅也 制於外 所以養中也 外不齊嚴 則內不主一也 故又號汝以嚴室 念茲在茲 慎茲在茲」(七八) 則聖人之徒也

題石刻禽鳥五倫圖

鳳凰來儀衆禽必隨 鳴鶴在陰其子和之 雙棲有別 鴛鴦雌雄 題彼脊令興兄弟彝感 這倉庚賦朋友謨教懇到此五倫圖 人萬物靈不如鳥乎 慎書數字自警頑愚

呈倉光焉求子

聞澤氏使人到加納 匆匆採筆訪安否 前日來公族萬福 如何 予家亦無異也 前書紙尾逼迫 闕可言之一事 今述愚意啓之」(七八) 賢息近來學業如何 本邦之學學則學也 非吾儒之道也 東武西都之學者 所唱者仁義也 所勉者功利詞章也 使今日之學者 生於宋朝或遊蘇黃之堂 或入介甫同父之室 今日吾鄉之學者亦如此 不堪歎息 及于此議 明公謂何乎 吾儕雖不肖 必執鞭於程朱之門矣 明公教賢息 詳識大學之卷尾 孟子之發端 所辨在此 所行在此 聖人之學也 業与言不違 則雖不中不遠矣 中華扶桑雜博之學 無益於人 有」(七八) 害於己 明公已識得之 故不縷說之 疑賢息所遊故忘已非捩 以呈足下 不以耄昧罪 幸甚 恐俱再拜

堂前梅

霜摧雪壓一株梅 雨若氣和春意回 靜坐對花々亦靜 靜風復送暗香

來

書格銘

澤氏子求之

學而不厭 切問近思 克己則賢 玩物喪志 勿貪詞章 勤辨義利

視聽言貌 常戒放恣

刀架銘

同人求之

從氣謾剛 順義大勇 強者果敢 君子皇恐 起居謹嚴 用舍莊重

閉邪存誠 尤畏愆渎

又 同人求之

文武理惟 同攻守勢 不異健々 顧言行事 事正其義

自警

唐明皇開元之初 患風俗之侈靡 焚珠玉錦繡於殿前 上蔡謝氏聞明

道夫子以記誦博識 為玩物喪志 汗流浹背 婦家即廢所藏之研 精

勵如明皇 晚節猶以奢敗 甚(一七五) 哉奢靡之易以溺人也 激厲如

上蔡 猶未到聖也 甚哉學之難進也 今吾儕志道而志不立也 雖不

好數似之堂 猶嫌蕭然之環堵 欲潔壁新席 雖惡般樂飲酒之遊 猶

愛奇珍之美而不止也 不舍斯心 而欲至於彼道 則倒行逆施也 可

耻之至也 勤微無用之物 禁奢制欲 不習俗 不私己 即是入道

之門也 孔子曰 士志於道 而愧惡衣惡食者 未足共議也 上蔡曰

士大夫透得名利之關 是小歇處也 悲氣質之懦 憂學(一七五) 問之

陋 書以為自警矣

餞大野丈人東行

公往東關我西尾 送別一篇代幣篋 依俗勿成斐然章 嚴肅勤為君子

斐

上巳

暮春庭際色粧宜 櫻艷桃嬌段々奇 吾亦牕中修禊事 先因夫繇自治

私

祭故多米道雄丈人詩

七六

沒後一周夢一場 復逢春色却悲傷 皇々孝子實珍重 克續令名更有

光 雨中小園 奇哉焰火綠苔上 料識山榴一段

賦澤懋軒庭際

數尺小園春色濃 洗塵潔景雨濛々 洗塵潔景雨濛々 奇哉焰火綠苔上 料識山榴一段

紅

君子由來和不同 徜徉隨遇儘融々 今辰吾輩相聚處 苔綠草青躑躅

紅

端五呈壻家

五月五日 家々掛著艾葉昌蒲於檐間 有男兒家 列立木胄木長刀旗

幟於門庭 雖羅山先生博覽宏識 不記其始 不詳其由(一七六) 今

憶之 掛艾蒲者 三年艾治七年病 九節蒲引百歲齡之意乎 然徒列

檐間 不如慎飲食灸治藥療之功也 列木兵器者 辟兵符之誑說轉々

誤來歟 元和寬永之交 雖諸侯卿大夫 作紙旗 或盡龍虎 或圖武

人 列木胄一兩列而已 近年士庶人亦事驕奢 以絹紗綿布作旗旌

而森列木偶人若干 其費用不少矣 是以嬰兒弄物 為乳兒祝禱也

乳兒不知愛之 白鬚皴面老父仰見喜之 嗚呼愚哉昏哉 可笑之尤哉

程子曰(一七七) 禮一失則為夷狄 再失則為禽獸 信哉此言 以端

午一事 可按得他事 況金城湯池 非其人則不能守之 木胄木長刀

豈可辟兵哉 我儒自有辟兵符 所謂忠信篤敬也 孔子曰 雖蠻貊之

國 行矣 聖人豈欺我哉 外孫馬場重九郎生初逢端午 父仕宦在東

閩 故母子寓予宅 親族欲望作旗旌之美 予不諾之 作一章 書紙

旗 以與之 家門相續 生子生孫 則以之傳子孫 為馬場後裔端午

之警誡

探艾為糗實傷燂 千年不改遂繼踵 水中淬出菖蒲刀 亦作人間紛奢

備 哀小君脇坂夫人

備

脇坂夫人 姓藤 諱吉 歷少長慎禮法 逮始終有志操 匪直也人一家之光 父曰脇坂又右衛門 江州北郡脇坂莊故家也 淺井滅後潦倒幾年 而事大和納言秀一卿 後屬右大臣豐臣秀賴公 慶長甲寅 又右衛門與驍將謀士議軍 依博勞淵之要 構穢多瀬之寨 十二月蜂須賀阿波守至鎮」(七八) 帥大軍 競渡川 嚴攻寨 守寨諸卒重義輕命 勵兵盡術 然寡不能敵衆 大敗績 退入大坂城 又右衛門 勇敢為殿 竭力戰死 時夫人十一歲也 元和己未 宣仕土井利勝公 寬永辛未產男子 從五位下兵庫頭土井利長公也 正保甲申利勝公卒 夫人屬東海寺高僧澤庵宗彭禪師 落飾受法 號松華院主因正雲 悒悒迷暗于大燈之光明 欲濯汚濁於一凍之智水 謹守古訓從子愛婦 修己治人 親戚和 侍婢悅 或膳梵」(七八) 籍以安心或陰和歌而遣興 優游卒歲 今茲辛酉五月十日 嬰疾不祿 享年七十八 小臣不肖 在利長公采地西尾 忽聞訃音 謹錄平日所聞知夫人族譜之口實 以備令孫追遠之忘 設有識作誌之案 且綴哀詩一篇 擬菲薄之奠 以為淚從 以為祭文

明神尚享

才憐清紫好文英 志尚忠貞惡輕情 仕宦謹勤嚴窺窺 參禪了達更精明 生涯无遂宜家室 一旦掩粧即墓塋 空有青松千歲」(七九) 號復無百里聞風聲

延寶辛酉夏四月 武庫令君致事 即日嗣子吏部郎中蒙賜家督之鈞命 六月十四日 吏部郎中獻黃金時服 敢謝家督相續之忝一家老幼尊卑賀之慶之 老鄙儒亦謹賦一絕 以祝之且警之 於戲君有英才雄志之美生資 時有治教休明之賢幕下 國有東照神君之成式 家有寶地院殿之良法 書有修身齊家治國平天」(七八) 下之要道 君以美質行要道 守成式 隨良法 事明君則豈徒一家之慶而已乎 天下之幸也 疲癯殘疾者 賢君所恤也規諫警戒者 聖上所喜也 故無愧靡軀之無用 不恐卑詞之踰分

謾欲污尊聞 謹告輔弼人 新君即位舊邦新 商賈士農意氣津 遠讒親賢用其極 後來天下一良臣

我君武庫令君之顯妣松華院殿 卒武州江府邸 葬于江府城外天真寺」(八〇) 卒後四十九日 詣故拾遺大倉令君之原廟 三州西尾利勝寺仰拜松華院殿牌子俯賦一絕遙奉吊之 明神享否誠莊至處何無神 慎悼溫如玉樣人 東武西條同世界 氣魂體魄共天真

高坂彈正伝

淮陰侯 在楚匹夫也 在漢良將軍也 得其君則成其功 非其君則被賤惡矣 高坂彈正昌信者 武田信玄四將之一也 所謂四將」(八一) 山縣三郎兵衛昌景 內藤修理昌豐 馬場美濃信房 高坂彈正昌信也 昌信初名春日源五郎 父號大隅 甲州伊澤農夫也 大隅死時昌信十六歲 与姊爭論田地 訟之 信玄決斷 以昌信為非 然而喜其器 賞其才 信玄用之為士 事後續信州高坂入道某之家 冒高坂氏常近侍信玄 討論武道 講習歌字 屢有武功 為四百五十騎將 守信州河中嶋城 防禦越後長尾謙信 威嚴不撓 信玄卒後 勝賴使昌信築遠州相」(八二) 良城 隍壘槽堞得其法 防戰之易 功圍之難悉盡美矣 勝賴喜長坂跡部兩俊臣 以諂諛為忠臣 以剛暴為武勇政令不正 賞罰無信 國危士恨 昌信作甲陽軍鑑 及末書 結要品三品 以記信玄兵謀之事 規諫勝賴也 天正六年昌信死 後四年果甲州滅 嗚呼信玄不仁者也 以所不愛及所愛 惜哉 昌信所仕非其君 故徒有才勇之質 而無成功 若使事織田信長 則与柴田丹羽相前後乎 伊藤源大夫保武 憶其人 慕」(八三) 其才 希其武 乞昌信後裔春日源五郎 求昌信真蹟連歌六韻 裝潢以揚床頭 賞珍之使予錄彼大概 予不詳始末 僅記十之一 以擬昌信傳 勒真蹟上矣

題大黑圖上 伊藤保武乞之

摩訶伽羅 莞尔喜色 俵囊及椎 所求即得 貨財幾千 米粟萬億
不依商賈 匪務稼穡 兵家者流 故仰此德 吾儒說政 足兵足食
食知艱難 儉身豐國 其本是信 事々戒敕

題豐臣秀吉神君像

「(八二)」

匹夫業大昇閔白 勅諭魏々豊國神 治六十餘州壞乱 誅三百零歲克
臣 攻朝鮮奪漢南氣 城浪速來烏卯民 軍略戰功無可比 磐余帝後
有斯人

雪

風吹黃雲萬木響 遂噴白雪厭塵埃 目前頃刻花滿枝 亦是陰陽不測
象

草堂即事

西尾城隅一草堂 境幽宅寂事無妨 主翁慎獨心漸廣 俗客不來日自
長

「(八二)」

明道夫子傍花隨柳圖

玉色金聲程伯淳 德輝遠被日東人 古今一樣同花柳 猶託仁風名更

新

荅神像

聲譽正高延喜天 文章才藝共能全 謫居宰府雖身屈 神德日新七百
年

立春

三冬盡處一春來 衰老未知暖氣回 從此堂前應有興 自看次第百花
開

「(八三)」

壬戌雞旦

春入舊廬亦樂胥 花探經史世情疎 細看物象有生意 識得陽光浸復
初

又

欲題新年愧巧言 捨毫恐俱舌無捫 何時恭講三元禮 城上拜君飲獸

樽

和書生崇教韻

賀歲試毫語最真 乾々温故必和新 書齋自有太平象 地靜天和壬戌
春

澤氏譜

題澤俊明

「(八三)」

伊川程夫子曰 宗子法壞 人不自知來處 以至流轉四方 往々親未
絕 不相識矣 又曰 豺獺知報本 今士大夫 厚於奉養 而薄於先
祖 甚不可也 中華三王之世 明譜系 収世族 立宗子法 我朝亦
上世有萬多親王姓氏錄 季世有鹿苑相國大系圖 應仁以來 亂賊盛
正道泯 三綱頹敗 八道糜爛 人不知出自 甚不辨五世之同族 不
肖 慚愧之至 感激之餘 錄所聞知祖禰事實之大概 以遺後嗣矣
祖父諱俊盛 姓源 澤「(八四)」號勘右衛門 累世江州淺井之家臣也
淺井長政被滅于織田信長之後 俊盛有張良為韓狙擊秦皇之志 與舅
樋口庄司次郎俊盛後親傳共窺信長 信長使勇士數十人 誅淺井家臣之渠
魁數人 俊盛一日逢信長之監使 却戮監使一人 遁去也
俊盛刀和州千手院
作國所知之利刀院

也 故見死骸之爽快兩斷 人從俊盛之所為也 脇坂又右
衛門 亦樋口庄司增也 有故此刀與 脇坂又右衛門也

澤樋口晦跡於山林 避害 信長被弑于明智光秀 而後俊盛歸住舊「

（八四）領牛打郷 天正十一年 豐臣秀吉公與越前柴田大戰 俊盛属

山内對馬守 勵武勇 有聲譽 豐臣秀吉公統一日本 而後賜山内對

馬守遠州掛川 自後俊盛事山内氏 慶長五年 石田三成亂逆之時

山内氏竭志節於松平家康公 以其功賜土佐一國於對馬守 對馬守先

使福岡丹波澤勘右衛門 發向土佐 對馬守續到土佐 然長曾我部殘

黨 催國民 聚兵器 以防之 福岡澤以貨賄 以謀計 誘巨家若干

人 入浦戸城「(八五)」而後誅戮長曾我部遺類 而脇從赦之 平均

國中 歷年 移浦戸城于高知 富永某長子 與俊盛長子爭事 相殺

死 故次男三之丞俊房續家督 寬永九年 大政大臣源秀忠公薨御

十年征夷大將軍家光公 遺巡檢使於日本國中 山内土佐守使俊房掌

修補土佐甲浦巡檢使旅館之事 甲浦吏富永伊織（祖二萬石 兼勘二萬石 伊織相殺死）與澤氏以兄之

事有宿怨 故事々作室礙 事不行 却諧俊房不才 俊房不堪忿

正月二十九日與富永（ウハ五）伊織相殺死 時三十六歲 澤富永胤子

共潦倒矣 俊房男子三人 長俊明（號九 兵衛） 次俊重俊元 母毛利氏 寬

永十二年十一月十五日 俊明十六歲 拜土井大炊頭利勝君 而後以

利勝君命 仕利勝君二男兵庫頭利長君 弟二人亦仕利長君 今茲天

和二年壬戌正月二十九日 先考沒後五十年也 嗚呼凶暴之豺獮猶知

報本 可以人不知報本乎 於三州西尾 率弟及子 以聊為祭祀之禮

也 不肖今年六十三 戚國（ウハ六） 俗之不詳審 哀幼孤之無見聞

涉筆告後嗣云爾 子々孫々讀此記 繼述吾志 則自知三綱之大 自

為聖賢之徒哉 澤九兵衛源俊明錄焉

和鈴木畏三丈人雞旦韻

世粧物象春珍重 雲影天光時軟輕 解后誦君新歲句 因思陽長祝前

程

園桃

灼々天々數十株 笑風嬌露色粧殊 淺深紅白如鮮錦 遠近淡濃似

畫圖 不聽漁郎（ウハ六） 迷溪畔 惟嘆詩客題玄都 優悠寂寞吾廬美

謾比桃源足自娛

櫻花

陣々春風段々英 書齋富貴百花盛 山櫻爛熳巧如織 即是老儒書錦

榮

書通鑑綱目卷末

傳心要典麟經後 子細謹嚴綱目編 乱賊明良如照鑑 一千三百六十

年

伊藤武藏守譜 代伊藤源大夫保武

家有敝帚直千金 信哉斯言 於舊書櫃反（ウハ七） 古堆中 得一紙記

文 從豐臣秀賴公死 忠臣義士烈女貞婦名目也 其記曰 元和元年

五月八日 正二位右大臣羽柴豐臣秀賴公 於大坂山里丸櫓藏自盡

介錯森豐前守 母淺井備前守長政女 號淀殿 生于摂州大坂 以生玉明神

為氏神 幼名御捨 幾時二十三歲 母公淀殿同自殺 介錯萩野道喜 大野修

理亮治長 速水甲斐守時之 森豐前守勝永 真田大助 左衛門佐子 速

水出來丸 甲斐守子 津川左近 伊藤武藏（ウハ七） 守 幼名弥吉 武田榮翁

武田左吉 森嶋長意 萩野道喜入道 初名氏江内膳正 加藤弥平太

堀 對 馬 守

高橋半三郎 片岡十右衛門 寺尾勝右衛門 土肥庄五郎 植原八藏

植原三十郎 京極備前守 今木源右衛門 大藏卿 大野修理亮母 右京

大夫 木村長門守重成母 三位局 饗場局 宮内卿 伊茶局玉局 從死

之（五月八日 使伊藤福部守孝問城中 近侍之衆士名目 於大野修理亮 修理自縊以答楊部 故傳世云々） 嗚呼 伊藤武藏守者 愚祖先也 愚雖

不能立身行道（ウハ八） 揚名 聊顯祖先之忠勤 亦孝之一也乎 故記

所聞知事蹟之大綱 以表其忠心 且欲令子孫思其令名也 藤原利仁

將軍之後裔在北國號齊藤 其後移住於伊賀者號伊藤 子孫散在諸國

伊藤對馬守 幼名弥吉 尾州津嶋人 仕豐臣秀吉公 天正十二年秀

吉公陣于尾州犬山 織田信雄公 松平家康公 陣于同國小牧合戰

列右隊五人之一（ウハ八） 也 野村內藏助 伊藤弥吉 多賀宗十郎 秀吉公攻朝鮮

對馬守帥二百五十騎 候名護屋御陣所 而後為江北郡代領二萬六千

石 子武藏守（母井土村左 京光慶友） 亦初名弥吉 仕豐臣秀賴公 為輕卒隊長 関

原陣受大坂命 伊藤武藏守 野村肥後守 與立花飛驒守 攻江州大

津城 自後加石田治部少輔三成大垣陣 石田敗亡之後 家康公罪之

流于奥州津輕 尾張重相義直卿母君 頻請宥之 家康公許諾之 武

藏守復仕秀（ウハ九） 賴公（義直卿母 八幡宮社司女也 以故諡家康公 善法寺 對馬守增也） 對馬守死于配所

武藏守弟半左衛門仕大坂 属尼子三郎左衛門隊 巨家堀田右衛門守津安嶋

兄同属石田 故罪之 放福嶋左衛門大夫正則領藝州廣嶋 後仕正則

大坂陣 去藝州至大坂 与兄同致其身 元和元年五月七日 於城

外戰死也 謹考秀賴公不愧己 不損志 不汚名 勇將哉 平氏宗盛

之繹綫 織田信雄之卑屈 以秀賴公議之 謂何哉 從死之士 不可

耻諸」(八九) 葛瞻 嚴然忠義哉 孔子曰 君子成人之美 不成人之

惡 愚子孫觀斯文 謹勤以成祖先之美 所欲望在茲 勉強勿懈

雖不得教一經 此一卷比滿籙金 以遺子孫矣

對馬守裔孫伊藤源大夫保武誌焉

賀多米時富生次郎之慶 添故拾遺太倉君之舊物

舊君舊物泥金扇 以賀弄璋祝俊彦 光采薰風實不凡 陰陽闔闔宜通

變

中秋不見月

秋夜朦朧却似春 不除庭草露溱溱 學堂」(九九) 趣靜自無客 思在

光風霽月人

冬日即事

冬日更如春日融 滿庭霜葉亦黃紅 靜觀物象無非學 實是陰陽變化

功

去年十月十五日來住此精舍 今日已一周適有所思寫懷

精舍風光已一年 老衰更喜此身全 因觀花實春秋象 自感陰陽變易

天

紅葉

純陰景象似含章 楓葉於花更有光 後素」(九九) 聖言今又感 紅粧

黃色悉成霜

冬日雜詠

地凍天寒心益傷 貞哉萬物靜收藏 含章紅葉隨風盡 只見池塘草色

黃

冬至 十一月二十五日

陰極堅冰大雪辰 忽然地底一陽新 春秋戰國孔孟象 也是狂夫克念

真

癸亥試毫

筭老更驚新歲臻 舉盃猶祝廢衰身 世間輕薄我無意 樂荒園半畝

春

又

雨師洗濯舊年塵 庭際梅花氣色新 可笑玉堂華屋偽 不如目巧室中

真

和崇教生試筆韻

新歲句成語意恂 喜歡學路步趨頻 朝霞千里文章美 伊洛吉良同一

春

和嚴室生試毫韻

愛著一年文字魁 尤歛良友遠方來 乾坤易簡詩章理 料識陰陽闔復

開

和三折生試毫一律一絕之韻

時至東君成厥威 吾儕樂利祝三微 望芳遙憶野花色 嗜味惟誇苑菜

非

學竹扉

試筆意誠調韻律 和章言巧辱樞機 輕情猶慕無為古 強作松門

絕句

新

雪

紛々老幼賀元晨 白髮不同綠髮春 雖氣轉鈞我仍舊 惟看句律一番

榮

題山口上正筆蹟

語曰君子成人之美 況於父之美乎 記曰父沒而不能讀父之書 手澤

存焉 爾況於父之真蹟乎 山口昌榮以顯考上正老人之真蹟 裝潢成

軸揭床頭尊信之 其警策語曰 千日用心一時滅亡 實非常人姑息之

語 所謂一息間斷天理即滅之義也 易曰 君子以自彊不息 孔明曰

鞠躬竭力死而後已 皆以一轍也 昌榮請予記其綱要 為真蹟上題辭

於戲彼良家豪士 我草茅^(九二) 賤民 班別雖異同年仕井利勝君

似有舊交之信同僚之契 故不固辭勒所聞知之大概矣 山口上正 父

橋本氏 母大內餘裔山口修理亮多多良重政妹也 慶長己酉生于総

州根本邑 山口重政 事東照神君台德公 慶長癸丑不幸會冤得罪

蟄居 元和壬戌有旨赴播州姫路寓本多忠政 重政請利勝曰 餘命

不幾後會無期 顧問多年恩遇難忘 取外甥為子属公 以使致其身

進退隨器無憚役之 誠上正曰 利^(九三) 勝於我有功々 偲々之信懷

以木桃報瓊瑤不遂其志 故使汝事利勝以事吾之孝為仕利勝之忠勿懈

也 利勝感重政深志 翌年徵庸上正特有恩遇 利勝卒而利勝家督

利隆使堀江氏及上正属弟利長 時談侍臣曰 堀江氏於家積牘之舊士

也 可為長臣 上正近時先知幕府營中之式樣 記卿大夫士之來由

也 可謀外事 予亦雖愛之利長幼弱也小家也 可難得如斯人 故属

利長云云 上正信事利勝利長 竭^(九三) 力忘身 勤慎不懈巨細盡

分仰不愧 重政訓辭 雖見重政於泉下 必重政信愛之俯不忤警 昌

榮一言 所謂於其言無所苟之君子人乎 延寶七年己未四月十二日没

于三州吉良西尾之家 享年七十一 葬於瑞境山實相安國禪寺境内

號實巖上正居士 上正老人執友井川春良叔温誌焉

呈實相寺

前日被寄高步 賀新年 賜扇二柄 茗五袋 欣歛珍重 自後鄙夫

或苦老軀廢衰之厄^(九四) 或畏餘寒凜冽之威 或恤奴僕煩擾之勞

不能參堂答拜 多罪々々 邂逅多米氏談老師試筆之詩 吟玩感刻

謾汚芸韻 以達座側 惟見褒賞之微志而已 勿以詩看焉 仰冀以西

江水 為春良洗惡詩 縷々期遲日暖風晤語之時 頓首再拜

詩思似梅花耐冬 新年文字最清濃 向來白髮三千丈 高比石門瀑布

峯

禽鳥五倫圖

夫婦和而父子親 弟兄朋友及君臣 生民^(九四) 達道聖賢教 天性

自然仁義真 格物工夫窮此理 修身大本在斯諄 以人豈可不如鳥

猶是飛禽有五倫

二月十一日雪

猶行冬令仲春時 綠竹青松雪壓枝 肉食人誇遊興美 藜藿農患麦麪

萎 開谷忽變大壯象 飛鳥似悲小過危 獨感游楊嚴恪志 學周易私

淑程頤

題筆道達人加茂甲斐額上 四言

題字常顧 養志臺々 餘樂何言 所遇可顓^(九五) 筆法齊整 加

茂甲斐 亦愛心正 慎書紙尾

題敬義二字之額

直内方外 坤道中正 造次克念 恐懼必貞 言語必信 視聽精明

家齊國治 天下由平

德望雉賢秀才誦予春雪感興之詩 被示和韻舒卷吟玩 恐題辭褻

揚過當 不敢答賦之 唯以前韻應芳律 猶述廢軀之無用而已

身苦春寒已感時 如禽鳥不安枝^(九六) 忽吟句意英俊美 更嘆詩腸氣力萎

温暖違候恐^(九五) 傷物 老衰畏疾憶持危 威儀言語雖虧養 動息

節宜勤謹願

感應銘

感應之義 往來屈伸 一動一靜 生大極真 克中克和 成天理純

要得其正 舍已從人

三月三日 此日乙巳

春之暮月第三辰 巳日禊名正有真 盡美夫庭精舍畔 狂哉吾亦浴沂

人

春雨 懷時世粧

頻浥輕塵庭象新 莓苔添綠作青茵 柳枝^(九六) □重蒼無賴⁽⁸⁾ 不待

狂風減却春

雨中花

不熟不寒三月辰 快然意足草堂春 滿庭詩景蒼修飾 著雨枝々潤色新

答湯新

遠州掛川學士

秀才誤聞 不以予鄙拙 遠寄書來 感慰無量 所示文字 深切詳審 且知志尚之高遠 最可喜也 舒卷吟玩 三復文意 似已所得之深 而自信不疑矣 何索於衰朽之無聞 而慙慙枉問若是耶 此予之所不論也 有^(ウ九六)弗知 在問他人而知之 勉与不勉 此非他人之所能與 然不敢無報也 故述予學之無統 不敢陰其固陋 以謝之 予艸茅賤民 章句腐儒 無嚴師畏友之教誨輔導 唯尋行數墨 不知吾學之帰趣 幸綿力薄材 自無博覽之志 唯讀過學庸語孟之書 及晚聊似有所了 而知空文之無用 而覺聖賢不我欺也 竊歎吾人學術之乱道而誤人也 不知秀才師友淵源之所自也 問竹田氏 則知秀才之齒甚少 而家有嚴君之^(ウ九七)尊焉 唯不用外求 必於聖賢小学之教 少加意 則進修自有序矣 勿徒弊精神於言語文字之間 以空言為實學也 嗚呼詩文藻繪 詞章之學也 故伊川夫子以詩文害道 又雖讀聖經 不敢理會 喜多識 誇博覽者 記誦之學也 明道夫子誠上蔡之玩物喪志也 後世之儒者 講淵洛關周之書而不知道 猶漢唐儒士讀六經語孟而不知道也 實可嘆息矣 吾人讀書 喫緊著力處正在天理人欲二者相去之間耳 語其始^(ウ九七) 則在察義利之辨矣 秀才以為如何乎 今日之學者 日誦聖賢之書 而不識聖賢之意 其口所尊者 孔孟程朱也 其身所勤者 或管晏也 或蘇黃也 甚者儀秦孫吳之流 而陷狂妄之域 而不自知其非也 又好閑散寂靜 入虛無禪宗者 是象山陽明之餘習乎 予所思如此 亦狂妄也 秀才謂何哉 可慚可愧 秀才往日之著述數篇 被呈示之 予不能作詩 不知為文 故只一覽還納之 嘗聞有詩人之詩文人之文 儒者之詩^(ウ九八)

文 吾不知為何詩文也 秀才自省察尔 雖欲縷陳 文章不巧 况老廢勞致思 姜手苦書字 聊書所思 以代面論而已 秀才亮察 春良頓首再拜

和湯新丈夫試筆韻 有所感以應其意而已 勿以詩看焉

新年新意發毫端 遙憶家人能盡歡 貧富窮通皆運數 勿聽非禮俗論謹

摘澤懋軒見花和歌之末字

美景雖可惜 賞心何不憚 慣嫌俗客來 却^(ウ九八)受君子責

摘同惜花和歌之末字

狂風暴雨草堂曙 十分春色九分去 衰老難期來歲春 空望樹頭勞心慮

跋羅山林先生勸學文

此篇羅山先生述作 手自書以所賜予也 時予十一歲 初不知謂何事 中讀以為學者之常談 然而屢誦此文 終知學之全體大用在此矣 嗚呼 中庸 孔門傳授心法 雖本於天道性命之微 而其實不外乎達^(ウ九九)道達德之粲然者 予長于雜學紛擾之中 獨不為記誦詞章之習 而有志聖賢傳之學者 先生此訓辭之力也 予今年六十七 殘喘不幾 悲無吾學之傳 惜此文之散在反古堆也 若學者得此書 善讀玩索而力行之 則先聖之所以傳 先生之所以教 有自得之也 門人井川春良記

與澤懋軒

宋名臣言行錄 全貳拾四冊 返納之 大小程子之篇 上蔡龜山之冊 校合了 是正文^(ウ九九)字 喜明公富書之功也 此錄 草々讀過亦格物之一也 子細体認 則一摺一掌血 一棒一條痕也 希聖希賢之模範 不外之 明公餘力之日講習之 良友會遇之節討論之 則以友輔仁之實事乎 不宜 亮察 春良再拜

新古今集跋 代澤氏

新古今集二十卷 詞華言葉之美 一代之一体也 既京極黃門嫌華而不實也 信不可類周召二南之二十首 然而和歌我國」(一〇) 俗之所玩也 故揮筆以成書與幼女子 我今年六十四 目力不能寫細字之真鄙才不能講二南之義 惟庶幾兒女窈窕之一助爾 易曰 未濟男之窮也 自憐老年無丈夫之志 聊記一語以呈之 所願汝等有葛覃卷耳之化宜其家人也

古今和歌集跋 代澤氏

古今和歌集者歷代勅選之冠冕 所謂蒼實兼全言意相備者也 雖猶有樂而淫哀而傷之弊 其体近得性情之正者耶

點茶

茅齋知止足 無事不安寧 火積爐中暖 水盛瓶裏冷 察幾思此照 畏陷慣其冥 震艮共嚴肅 坎離用不停 風聲添釜沸 樹色映茶青 口腹一般潔 睡眠次第醒 卒宜學聖易 何願達仙靈 玩物有明誠 欽哉惺又惺

端午詠懷 五日午日也故有此懷

斗星建午月 自是始陽衰 五日適端午 陰生於午時 陰陽消息義 淑慝往來危 君子於此節 慨然可有思 早憂陽剥象 嚴畏女」(二〇) 壯辭 動靜必貞正 性情固執持 慢遊驕奢本 輕薄暴棄資 邪僻憐忠憤 老羸弄愚兒 艾符及筒粽 蒲酒或旌旗 誰耻丈夫諱 惟懷婦子嬉 腐儒勤為己 學習最嫌奇 俗說既無意 聖謨愈致知 察幾慎否塞 慎獨憶明夷 不敢語群小 自警毋自欺

悼松華院殿大祥忌

荏苒無情四序遷 君婦冥漠已三年 牌前今日老儒淚 特憶往時更濟然

詠懷一首上 土井遠齋公足下

六十年前癸亥冬 君正五歲吾七歲 始拜君相共嬉遊 君是龍種吾是鼯 進德修業君不群 或在深淵望雲際 貪多務獲吾思功 遂欲通達

却滯泥 謾過生涯感厚恩 素飡祿俸耻才藝 猶憶往事無友談 鬱憶難散更濺涕 謹案先公全盛時 德澤名譽最威勢 至今後胤已堪哀 僅喜太守能永世 犬馬餘齡日薄西 長君不幾漸近斃 遙察起居祝眉壽 強写下情獻階砌

戲為

」(二〇)

和烟青草濃依砌 含露白蓮淨植泥 自笑偶然無得意 世人將謂學瀟溪

哭孫

人賀永年是為何 生涯巨細悉蹉跎 此翁不死最無益 只失兒孫哀淚多

又

累愛子之子樂生 亦如舐犢願前榮 悲風驚破五年夢 自是功名不繫情 すゑの露消てあはれに残る身の涙や今ハかたミなるらむ 心そとおしへかしこきことハりに人目忍ふのもりの下つゆ」(二〇)

又

をくれしとおもふおもひもいつハりとなりて哀に目をかすへにけり

祭土井利勝公文

維天和三年 歲次癸亥 秋七月十日己卯 末席微臣 章句腐儒 兼山井川春良 恭敬再拜 以菲薄之奠 告于近故古河城主 日本大著從四位下 侍從 大炊頭土井利勝公靈凡之前曰 補弼忠良 古來幾許 神代書紀 不詳無考 磐余天皇 創業垂統 皇孫相繼 二千餘年 上古事簡 亦不明白 王道」(二一) 中微 藤氏竊權 謾為威福 徒事驕奢 以和歌為道德 以禮教為政教 清盛奪柄 王化益衰 賴朝姦雄 以暴易暴 王道如絕 悉歸武威 北條數世 各專功利 不知道義 不思忠信 足利歷代 只憑勢力 冠履違用 尊卑失禮 大道不明 古風日弊 應仁之後 臣道遂喪 士氣懦弱 臣職無人 俯

仰徇俗 前卻觀勢 其心有一身而無天下 其口有唯々而無諤々 猗歟 我公 氣溫質良 不假修為 嘿與道契 望之可畏 即之可親 恂々翼翼」(三〇) 家庭敬慕 閭々侃々 朝堂瞻仰 財成 東照台

德之教化 輔相 元和寬永之治平 納諫補闕 如己不與 進不面從 退無後言 成允成功 不矜不伐 本朝語治 最稱延喜天曆之盡美 察其實 何如元和寬永之盡善 我公 雖不讀書 暇日必召羅山東舟二儒 聽治國之要 問修身之法 其志其德 益宏益深 或使予兄弟 講中華之史策 讀本朝之記錄 考察臧否 厭去浮誇 嘉言討論 唯道是求 不信僧尼之誑誘 不惑巫祝之」(四〇) 虛誕 時俗輕薄 競望官位 惟貪榮名 不知其量 我公篤敬 勅任侍從 謙退固辭 寅畏其職 相廷疑議 我公一言 君必都俞 衆皆心服 所謂雀之千噪 鶴之一聲也 克勤于邦 克儉于家 盈而不溢 高而不危 制節財用 謹守法度 無玩物之累 無滿假之心 未有如我公也 近世所見知 不見如我公 往古所聞知 不聞如我公 命世之才德 希代之君子也 微臣 不肖 幼童七歲 以聊讀書 辱賜月俸 日月變遷 六十一年 嗚呼 使予」(四〇) 無寒餓之患 而有恒心 實我公之恩澤也 雖於本朝未傳之道統 敢不妄議 而知聖學之廣大 求仁義之綱要 亦我公之恩澤也 蒙被鴻恩 動靜思惟 如峯巒之峙 如滄海之涵 欲為報恩之曼乙 謹述我公之端倪 我公行高 子業文卑 祗以為累 更懷愧懼 直写胸中之誠 以告我公而已 尚精爽鑑愚衷

陪侍源吏部君平坂水嬉
海面渺茫水接天 天心人氣共溫然 御前」(五〇) 多少好山水 慎比我君智仁全

九月十三夜侍源吏部君席
金氣彌深霜露稠 靜望雲際思悠々 天工亦似惡文著 月黑吉良最末秋

閑庭紅葉

霜經露緯錦機精 青紫紅黃段々明 自在幽庭人未識 恰如君子不成名

參州松應寺修補上梁銘 代源吏部土井利忠君 有故不書之隨俗流
參州勝地 岡崎城傍 山欄能見 淨臺道場」(五〇) 寺號松應 念佛法堂 棟宇作勢 柱楣致粧 侵凌風雨 經過星霜 飄轉屋瓦 敗壞垣牆 台命無監 工役慎強 百成修補 一依舊章 僦功成效 儀矩又彰 聊記大體 以欲遺芳

呈山田玄春丈

昨山崎氏來 告賢誠予浚恒之凶 多幸大慶 以銘於心頭 悅有良友 欲謝賢瓊之厚志 恨無予桃李之踈報 聊以予中心之實 報良友之德耳 予讀聖經六十餘年 以勿欺也而犯之之六字 為事君之大綱 又以」(六〇) 格君心之非之五字 為不素食之一事矣 然而聊知順理從欲之裕危 未察循時徇俗之分辨 向後以何為養犬馬餘齡之道哉 雖所願學孔子也 含章韜光之德 非予氣質之所能也 暫舍焉 伯夷之清過隘 展禽之和不恭 末世吾輩所安身者 以和為宜乎 進不隱賢 必以其道 所以展禽為展禽也 舍此二言 專以和為宜 則紛々輕薄之士也 非聖門學者之事也 賢以為如何 嗚呼 周易使人知時之聖經也 予以之坤」(六〇) 之六四乎 抑遯之六二乎 賢考察之以教予 則幸之又幸也 責人明 青已暗 人情之常也 況老憊倦怠 多日廢書 望事迷幾 故以數十字写情 伏乞賢之諫言 士有爭友 則身不陷不義 誠哉斯言 手凍不能書字 心拙不能成章 艸々亮察 野妻江口婦人沒後七年之忌日述懷 更憶閨門情義精 如望儀貌淚從橫 對誰說盡七年恨 只羨幽冥歎我生 宰上空存沒後名 霜摧宿草雨隳塋 感時」(七〇) 對物哀無限 淚更濺 心亦驚

冬日即事 冬至二候

一陽復處雪紛々 緑竹青松皆偽文 静屈爐辺原筮易 初爻乾象是吾分

日本國俗 女子十三而含鐵漿黑齒 貴賤皆然也 我君武庫令君元女諱婦 於西尾城隅家臣之居成此禮了 小君尊母大江夫人賜染齒之器物 令嗣吏部郎中君命賀儀之事 小臣春良 賦一詩以賀 今日之嘉幸 兼祝後來之繁榮 以「(七〇)」以小陰之數八字為一句

至祝我君系統大姬 鐵漿含口益飾容儀 才祈儔清紫風流美 德願称家門貞靜資

答倉光敏清

辱賜專使喜開封書 常怨離兌違行之象 復感同氣相求之志 玆重芳志嘉幸厚 德竊等尊老遐齡已過不踰矩之數 聽猶震良安寧願養得正且承家族無恙外孫有祥 況君恩厚養老之惠 薄役使之勞 崇國俗之克寬 羨我友之克勤 兒孫膝下之優「(八〇)」遊 天然之安樂 以何慶事比之 我則異之 唯有女孫一人男孫一人 頻懷舐犢之愛 不幸此六月遭疫痢之厄 間七日兩孫物故 如毀檀中之龜玉 雖匪恨九代之文十袂之書 無其傳 悲彼齡之短恨我生之長 可憐々々 承渡子容猶在武城 不倦公私之勤勞真丈夫哉 愚老犬馬之餘筭 徒求古人之糟粕耳 解后我新君憐老儒之衰憊 命後嗣之相續令養他氏以匹幻女冒井川氏 頻感君恩幸接祖武於此時益傷「(八〇)」兒孫之喪 更悲亡妻之昔 断腸沾袂暗似昏禮不賀之語者乎 前年所贈賢息之書籍品々 返賜之領納如別幅 予無餘齡空束架上 終為反古堆之塵而已惜哉 如予却不怕祁寒之嚴威 憶速免叩脛之罪也 賢老慎保齋 弥竭君臣之義 全父子之恩 為國為家可慶賀也 被惠美酒珍肴 尤感憐衰之厚意 天寒手凍不能書字 况老廢薄才不能成文 故艸々閣筆事々諒察 恐惧再拜

呈山田玄春

「(九〇)」

隆冬盛寒之威 侵老羸衰廢之軀 志雖慕豫章之嚴毅 躬不任后山之苦節 故不能登城 案上探方書 炉邊煎合藥 以聊保養衰軀而已伏乞 達我嚴君之高聽也 遙憶公堂衆々六出之風流 我廬亦庭際一畝之景象不凡 所恨無詩友無詩志也 頓首

賀畏友多米時富丈夫生三郎詩一首 以祝門葉之殷昌 且頌後來之剛正從以夙興夜寐箴一本 父母教誨以此箴「(九〇)」三郎省察以此箴 雖不及聖賢亦不失令名

三索貞正而得良 終始萬物可無恨 克知止足克成言 謹祝眉壽最剛健

「白紙」

「(〇ウ・止)」

「裏表紙見返し」

「裏表紙」

注

- (1) ママ。脱字あるか。
- (2) 「□」は「花」を胡粉で抹消。
- (3) 丁子は丁巳の誤記か。
- (4) ママ。脱字あるか。
- (5) 「心」は「象」に胡粉を塗って訂正するも胡粉が剥がれており、一部残存による推測。
- (6) ママ。脱字あるか。
- (7) 「不」を修正しているが表面が剥落して不明。
- (8) 「□」は虫損。
- (9) 「和」は虫損。



【図版1】表紙

冬至前一日雪
近日一陽欲復辰紛々白雪勢如暝靜觀
上六至陰象戰兢自持君子人

雪

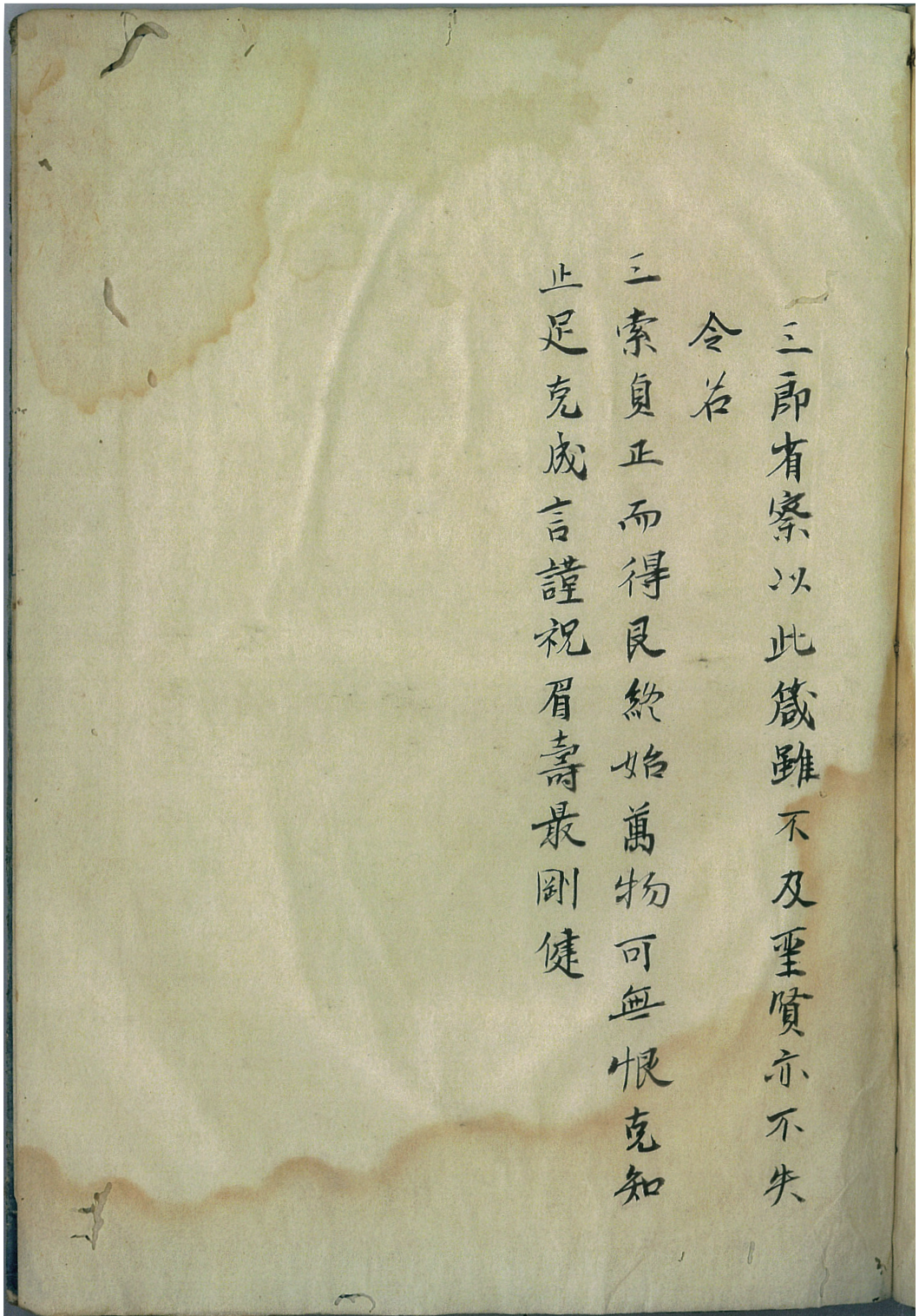
地面皚々敷白沙栖鴉飛鳥噪誼譁獨憐
幽竹寒松色共著繽紛玉屑花

寒松

天地嚴凝千樹凋彰寒貞操獨翹々可憐
世上繁華節空有德音却寂寥
嘆老

呈山田玄春

隆冬盛寒之威侵老羸衰廢之軀志雖慕
豫章之嚴毅躬不仕后山之苦節故不能
登城案上探方書爐邊煎合藥以聊保養
衰軀而已伏乞達我嚴君之高聽也遙憶
公堂朶々六出之風流我廬亦庭際一畝
之景象不化昨恨無詩友無詩志也頌首
賀畏友多米時富丈夫生三節詩一首
以祝門葉之殷昌且頌後來之剛正從
以夙興夜寐歲一本父母教誨以此歲



三郎省察以此歲雖不及聖賢亦不失
令名

三索貞正而得良終始萬物可無恨克知
止足克成言謹祝眉壽最剛健

【図版4】卷末（一一〇才）

